

国営アルプスあづみの公園  
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—大町市内 その2—

かた	だいら	遺	跡
肩	平	遺	跡
すげ	の	沢	遺
菅	ノ	遺	跡
ま	ね	き	遺
てら	が	いと	跡
寺	海	戸	遺
しん	めい	ばら	跡
神	明	原	遺
くぼ	だいら	遺	跡
窪	平	遺	跡
やま	の	かみ	遺
山	神	遺	跡
ち	がわ	せき	てい
乳	川	石	堤

2004. 12

国土交通省関東地方整備局

長野県埋蔵文化財センター

国営アルプスあづみの公園  
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—大町市内 その2—

かた	だいら	遺	跡
肩	平		
すげ	の	さわ	遺
菅	ノ	沢	跡
ま	ね	き	遺
てら	が	いと	跡
寺	海	戸	跡
しん	めい	ばら	遺
神	明	原	跡
くぼ	だいら	遺	跡
窪	平		
やま	かみ	遺	跡
山	の	神	
ち	がわ	せき	てい
乳	川	石	堤

2004. 12

国土交通省関東地方整備局  
長野県埋蔵文化財センター



菅ノ沢遺跡 1号(手前)・4号竪穴住居跡



扇平遺跡 1号掘立柱建物跡

## 序

中部山岳国立公園の麓、安曇野に位置する大町市・松川村は北アルプスの玄関口として古くから登山者に親しまれてきた山岳観光都市です。この安曇野に広域なレクリエーション施設として国土交通省が設置することとなった国営アルプスあづみの公園は、大町市や松川村の豊かな自然とのどかな田園風景の中で休養や余暇の利用に期待されています。

本書は、平成10年から15年度の6年にわたる国営アルプスあづみの公園（大町・松川地区）の建設に伴う発掘調査の成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的としています。平成9～12年度には「トトロ石器」で脚光を浴びた山の神遺跡の調査を行い、平成15年に報告書を刊行いたしました。今回掲載した遺跡は、肩平遺跡、菅ノ沢遺跡、寺海戸遺跡、神明原遺跡、まねき遺跡、窪平遺跡、乳川石堤および山の神遺跡（平成15年度調査分）の8遺跡であります。このうち、寺海戸、神明原、窪平、山の神の各遺跡は、試掘調査によって遺構・遺物が確認されなかったため、一部の調査に留まっています。

大町市の中で常盤地区は平地区とならんで縄文時代の遺跡が多い地区として知られていましたが、今まで大きな調査が実施されたことがありませんでした。しかし、今回の調査では、予想に反して、平安時代の製鉄跡や古墳時代から平安時代の竪穴住居跡（菅ノ沢遺跡）、中世の掘立柱建物跡（肩平遺跡）など興味深い遺構や遺物が確認されました。これらの事例が、大町市をはじめ大北地方の地方史研究の一助になることを願ってやみません。

最後となりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた国土交通省関東整備局国営アルプスあづみの公園事務所、大町市、大町市教育委員会など関係機関に対し感謝を申し上げる次第であります。

平成16年12月31日

財団法人 長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
所長 小沢 将夫

## 例 言

- 1 本書は、国営アルプスあづみの公園（大町・松川地区）（以下「あづみの公園」という）建設に伴って実施された、肩平遺跡、まねき遺跡、菅ノ沢遺跡、山の神遺跡、寺海戸遺跡、神明原遺跡、窪平遺跡および乳川石堤の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国土交通省アルプスあづみの公園事務所（以下「公園事務所」という）の委託を受けた長野県教育委員会が、財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）が実施したものである。
- 3 調査概要は埋文センター刊行の『年報』17から20号で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 整理作業は埋文センターで実施した。
- 5 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の地形図「大町南部」「烏帽子岳」「大町」（1:25,000）、公園事務所作成の地形図（1:7,500、1:1,000、1:500）、大町市発行都市計画図（1:2,500）、大町市教育委員会作成の遺跡分布図を編集し使用した。
- 6 発掘調査に関わり次の機関に業務を委託した。  
測量：株式会社 協同測量社、株式会社写真測図研究所  
鉄製品成分分析：JFE テクノリサーチ株式会社  
C<sup>14</sup>（AMS）年代測定：バリノ・サーヴェイ株式会社  
遺物写真：株式会社長野フジカラー
- 7 発掘作業および整理作業の分担については第1章に一括掲載した。
- 8 本書の執筆・編集・校正は、藤原直人が行い、調査部長 市澤英利、調査第2課長 平林 彰が全体を校閲した。
- 9 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、大町市教育委員会が保管する予定である。
- 10 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表します。（敬称略）  
原山 智・戸沢充剛・小林達雄・篠崎健一郎・倉科和夫・島田哲男・鈴木 勝・赤羽貞幸・荒井今朝一

## 凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。
  - a) 遺構実測図：竪穴住居跡 1:60 土坑 1:40
  - b) 遺物実測図：土器実測図（土師器・陶磁器）1:4 縄文土器・土器拓影図 1:3  
石器実測図：1:3、1:2、1:1
- 2 遺物写真の縮尺は以下の通りである。  
土器 1:6（大型）、1:4、1:3、土器拓影片 1:3、石器 1:3、1:2、石斧 1:3、石鏃・勾玉 1:1

# 目次

第1章	序説	1
第1節	調査の経過	1
	1 保護協議	
	2 受委託契約	
	3 試掘調査	
	4 調査体制	
	調査組織 指導者・協力者	
第2節	発掘と整理の方法	4
	1 発掘作業	
	遺跡の名称と記号 遺構の名称と記号 検出と精査 記録	
	2 整理作業	
	資料の劣化とデータの汎用性 遺構の整理 遺物の整理	
	遺物写真撮影の委託 記録と遺物の収納	
	3 報告書の作成	
第2章	遺跡の環境	7
	1 遺跡の位置	
	2 自然環境	
	3 歴史環境	
第3章	肩平遺跡	11
第1節	調査の概要	11
第2節	遺構と遺物	13
	1 掘立柱建物跡と出土遺物	13
	1号掘立柱建物跡 2号掘立柱建物跡	
	2 柱穴群と出土遺物	13
	柱穴群1 柱穴群2	
	3 土坑と出土遺物	16
	1号土坑 2号土坑 3号土坑 4号土坑 5号土坑 6号土坑 7号土坑	
	8号土坑 9号土坑 10号土坑 11号土坑 12号土坑 13号土坑 14号土坑	
	18号土坑 23号土坑 31・66号土坑 33号土坑 42号土坑 45号土坑	
	4 集石跡	24
	5 遺構外の出土遺物	24
	土器 石器	
第3節	小結	27

第4章	菅ノ沢遺跡	28
第1節	調査の概要	29
第2節	遺構と遺物	31
	1 竪穴住居跡と出土遺物	31
	1号竪穴住居跡 2号竪穴住居跡 3号竪穴住居跡 4号竪穴住居跡	
	2 土坑と出土遺物	38
	平成12年度調査の土坑 平成15年度調査の土坑	
	3 沢と出土遺物	40
	4 遺構外出土の遺物	41
第3節	自然科学分析	43
	1 樹種同定と年代測定	43
	2 鉄の成分分析	45
	3 分析結果に関する所見	45
第4節	小結	47
第5章	乳川石堤	48
第6章	その他の遺跡	50
第1節	まねき遺跡	50
第2節	窪平遺跡	51
第3節	寺海戸遺跡	52
第4節	神明原遺跡	53
第5節	山の神遺跡	53
第7章	結語	54

写真図版

報告書抄録

## 挿図・挿表目次

- |                                       |                                    |
|---------------------------------------|------------------------------------|
| 第 1 図 試掘調査区及び本調査区的位置                  | 第 41 図 菅ノ沢遺跡の調査区配置                 |
| 第 2 図 山の神遺跡周辺のクリ・コナラ林                 | 第 42 図 H12 年度試掘 A 地点トレンチ配置及び柱状図    |
| 第 3 図 大町市・国営アルプスあづみの公園の位置             | 第 43 図 H12 年度試掘 B 地点トレンチ配置及び柱状図    |
| 第 4 図 大町市常盤地区の遺跡分布                    | 第 44 図 H15 年度菅ノ沢遺跡本調査全体図           |
| 第 5 図 あづみの公園内遺跡の垂直分布                  | 第 45 図 H15 年度基本土層                  |
| 第 6 図 H15 年度基本土層                      | 第 46 図 本調査区の遺構配置                   |
| 第 7 図 H13 年度肩平・まねき遺跡試掘トレンチ配置<br>及び柱状図 | 第 47 図 1 号竪穴住居跡 (SB1)              |
| 第 8 図 H14 年度肩平遺跡試掘トレンチ配置及び柱状図         | 第 48 図 1 号竪穴住居跡 (SB1) 出土土器         |
| 第 9 図 H15 年度肩平遺跡本調査全体図                | 第 49 図 2 号竪穴住居跡 (SB2)              |
| 第 10 図 3 区北側の遺構配置                     | 第 50 図 3 号竪穴住居跡 (SB3)              |
| 第 11 図 1 号掘立柱建物跡 (ST1)                | 第 51 図 2 号竪穴住居跡 (SB2) 出土土器         |
| 第 12 図 2 号掘立柱建物跡 (ST2) の周辺            | 第 52 図 3 号竪穴住居跡 (SB3) 出土土器         |
| 第 13 図 2 号掘立柱建物跡 (ST2)                | 第 53 図 4 号竪穴住居跡 (SB4)              |
| 第 14 図 3 区南側の遺構配置                     | 第 54 図 4 号竪穴住居跡 (SB4)・沢 (SX1) 出土土器 |
| 第 15 図 7 区の遺構配置                       | 第 55 図 H12 年度菅ノ沢遺跡本調査全体図           |
| 第 16 図 1 号土坑 (SK1)                    | 第 56 図 H12 年度調査の土坑 (SK1～9)         |
| 第 17 図 2 号土坑 (SK2)                    | 第 57 図 多量の鉄滓が出土した沢 (SX1)           |
| 第 18 図 3 号土坑 (SK3)                    | 第 58 図 菅ノ沢遺跡出土土器                   |
| 第 19 図 4 号土坑 (SK4)                    | 第 59 図 菅ノ沢遺跡出土石器                   |
| 第 20 図 5 号土坑 (SK5)                    | 第 60 図 (鉄成分分析グラフ)                  |
| 第 21 図 6 号土坑 (SK6)                    | 第 61 図 石堤断面                        |
| 第 22 図 6 区の遺構配置                       | 第 62 図 石堤平面図と断面図                   |
| 第 23 図 7 号土坑 (SK7)                    | 第 63 図 文化 13(1816) 年松川組西山村川除目論見帳   |
| 第 24 図 8・9 号土坑 (SK8・9)                | 第 64 図 H12 年度まねき遺跡トレンチ配置及び柱状図      |
| 第 25 図 5 区の遺構配置                       | 第 65 図 H12 年度窪平遺跡トレンチ配置及び柱状図       |
| 第 26 図 10 号土坑 (SK10)                  | 第 66 図 H12 年度寺海戸遺跡グリッド配置図          |
| 第 27 図 11 号土坑 (SK11)                  | 第 67 図 H12 年度寺海戸遺跡柱状図              |
| 第 28 図 12 号土坑 (SK12)                  | 第 68 図 H15 年度寺海戸遺跡試掘調査区            |
| 第 29 図 13 号土坑 (SK13)                  | 第 69 図 H15 年度寺海戸遺跡基本土層図            |
| 第 30 図 14 号土坑 (SK14)                  | 第 70 図 H15 年度神明原遺跡試掘調査区            |
| 第 31 図 18 号土坑 (SK18)                  | 第 71 図 H15 年度山の神遺跡基本土層図            |
| 第 32 図 23 号土坑 (SK23)                  |                                    |
| 第 33 図 31 号土坑 (SK31)                  | 第 1 表 受委託契約の概要                     |
| 第 34 図 33 号土坑 (SK33)                  | 第 2 表 試掘調査の概要                      |
| 第 35 図 42 号土坑 (SK42)                  | 第 3 表 H15 年度肩平遺跡土坑一覽               |
| 第 36 図 45 号土坑 (SK45)                  | 第 4 表 肩平遺跡出土土器一覽                   |
| 第 37 図 67 号土坑 (SK67)                  | 第 5 表 菅ノ沢遺跡 H12 年度調査土坑一覽           |
| 第 38 図 集石跡 (SH1)                      | 第 6 表 菅ノ沢遺跡 H15 年度調査土坑一覽           |
| 第 39 図 肩平遺跡出土土器                       | 第 7 表 菅ノ沢遺跡出土石器一覽                  |
| 第 40 図 肩平遺跡出土石器                       | 第 8 表 樹種同定と年代測定結果一覽                |
|                                       | 第 9 表 暦年校正結果一覽                     |



## 写真図版目次

- PL 1 肩平遺跡 出土土器・石器
- PL 2 菅ノ沢遺跡 出土土器・石器
- PL 3 肩平遺跡 H13・14年度試掘調査ほか
- PL 4 肩平遺跡 基本土層、1号掘立柱建物跡ほか
- PL 5 肩平遺跡 2号掘立柱建物跡、集石跡
- PL 6 肩平遺跡 土坑、溝状遺構
- PL 7 肩平遺跡 土坑、3区柱穴群1・2
- PL 8 菅ノ沢遺跡 H12年度試掘調査ほか
- PL 9 菅ノ沢遺跡 基本土層ほか
- PL 10 菅ノ沢遺跡 1号竪穴住居跡
- PL 11 菅ノ沢遺跡 2・3号竪穴住居跡
- PL 12 菅ノ沢遺跡 3号竪穴住居跡、1号溝状遺構
- PL 13 菅ノ沢遺跡 1・4号竪穴住居跡、土坑
- PL 14 菅ノ沢遺跡 鉄関係遺物が出土した沢  
まねき遺跡 H12・13年度試掘調査
- PL 15 まねき遺跡 H14年度試掘調査  
寺海戸遺跡 H12・15年度試掘調査
- PL 16 窪平遺跡 H12年度試掘調査  
山の神遺跡 H15年度試掘調査  
神明原遺跡 H15年度試掘調査  
乳川石堤
- PL 17 乳川石堤  
現存する山の神の祠と奉剣

# 第1章 序説

## 第1節 調査の経過

### 1 保護協議

平成2年4月、国営アルプスあづみの公園整備事業が採択されたことを受け、長野県教育委員会文化課、同土木部都市計画課、大町市・松川村・穂高町・堀金村教育委員会、同国営公園対策室からなる埋蔵文化財保護連絡協議会が設立され、あづみの公園内にある埋蔵文化財の状況把握と保護にかかわる問題点の協議が行われた。都合3回の協議会を実施し、平成6年6月にはあづみの公園内にある埋蔵文化財の発掘調査は埋文センターが行うこととなった。

平成7年度以降、工事事務所から文化財保護法第57条の3に基づく発掘届が県教育委員会へ通知されるにおよび、公園事務所、県教育委員会および埋文センターによる調整会議が毎年開かれた。調整会議では、次年度以降の整備地区にかかわる埋蔵文化財について保護措置が決定した。埋文センターは、三者の協議結果を受けて、法57条に基づき県教育委員会教育長あてに発掘届を提出し許可を得て、事業者である国土交通省関東地方整備局と受委託契約を締結した。

### 2 受委託契約

平成11年度から16年度までの、年度毎の受委託契約は次のとおりである。

年度	契約期間	内 容	契約額	備 考
H11		乳川石堤本発掘と基礎整理作業	44,186,223 円	山の神遺跡本発掘
H12	4/25～3/23	菅ノ沢・まねき遺跡本発掘と基礎整理 菅ノ沢・まねき・寺海戸・窪平遺跡試掘	41,539,440 円	山の神遺跡本発掘
H13	4/1～3/25	まねき・厩平遺跡試掘	25,042,788 円	山の神遺跡整理
H14	4/4～3/25	まねき・厩平遺跡本発掘と基礎整理 厩平・山の神遺跡試掘	38,754,131 円	山の神遺跡整理 (～H12分完了)
H15	5/7～3/26	厩平・菅ノ沢・山の神遺跡本発掘と基礎整理 寺海戸遺跡試掘 神明原・厩平遺跡工事立合	29,187,132 円	
H16	4/1～12/31	寺海戸遺跡工事立合 乳川石堤以下7遺跡分の整理作業	12,719,349 円	

第1表 受委託契約一覧

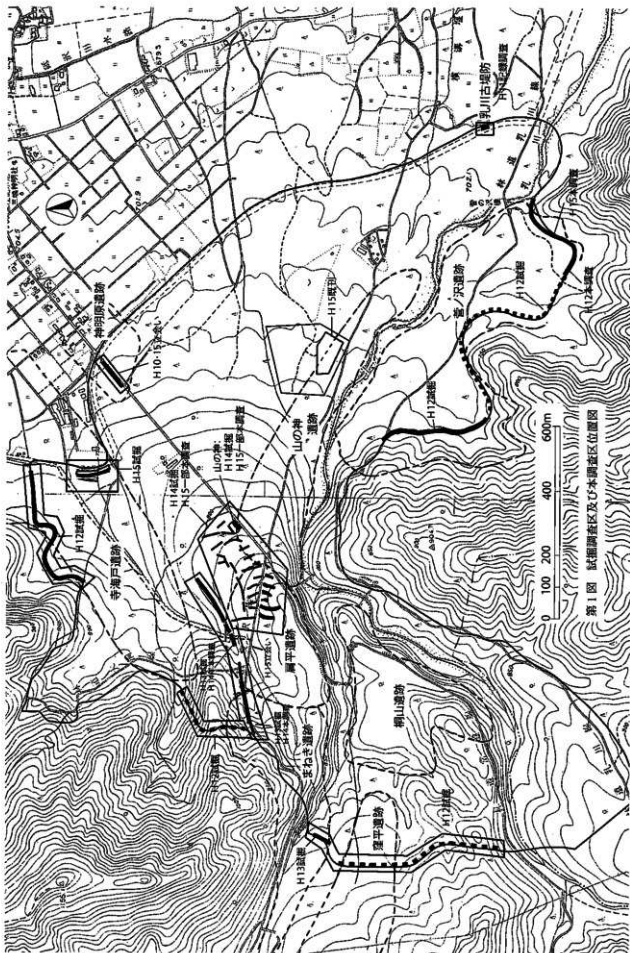
### 3 試掘調査

公園内の各遺跡は、原則として試掘調査により包含層の広がりや遺構の有無を確認し、県教育委員会が記録保存のための本調査が必要と判断した部分について本調査を実施した。

試掘調査の方法、面積および所見は次のとおりである。

遺跡名(記号)	方 法	調査面積(対象面積)	所 見
菅ノ沢(FSG)	トレンチ	1,204㎡(不明)	本調査必要→H12・15本調査実施
まねき(FMA)	テストピット	44㎡(不明)	本調査必要→H12本調査実施
	トレンチ	1,355㎡(4,400㎡)	本調査必要→H14本調査実施
寺海戸(FTG)	テストピット	68㎡(不明)	遺構遺物なしにより本調査不要
	トレンチ	300㎡(1,500㎡)	遺構遺物なしにより本調査不要
窪平(FKG)	テストピット	84㎡(不明)	遺構遺物なしにより本調査不要
厩平(FKA)	トレンチ	640㎡(10,000㎡)	本調査必要→H14本調査実施
	トレンチ	2,200㎡(29,600㎡)	本調査必要→H15本調査実施
山の神(FYM)	トレンチ	410㎡(3,400㎡)	本調査必要→H15本調査実施

第2表 試掘調査一覧



第1圖 試驗調査区及び本調査区位置図

## 4 調査体制

平成11年度から16年度にかけての発掘作業調査および報告書刊行に向けた整理事業の体制は以下の通りである。

## 調査組織

	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
理事長	吉村午良	吉村午良	吉村午良	吉村午良 田中康夫 10/26～	田中康夫	田中康夫
所長	佐久間鉄四郎	佐久間鉄四郎	深瀬弘夫	深瀬弘夫	小沢将夫	小沢将夫
副所長	山崎悦男	春日光雄	春日光雄	原 聖	原 聖	藤岡俊文
管理部長補佐	宮島孝明	宮島孝明	田中秀幸	田中秀幸	上原 貞	上原 貞
調査部長	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	市澤英利	市澤英利
調査課長	百瀬長秀	百瀬長秀	百瀬長秀	広瀬昭弘	平林 彰	平林 彰
調査研究員	川崎 保 上田 真	川崎 保 榎井秀雄 市川隆之	川崎 保	川崎 保 西島 力	齋田 明	藤原直人
発掘・整理 補助員	安藤千代 岡田千波 北原浩美 酒井正子 平林真紀 服部力夫 宇留賢忠則 原田 曠 原田 曠 宮下通子 久保田博士 太田千代美 宮沢茂子 竹内誠治 松岡 寛 古畑喜美子 松沢雄幸 松尾徳子 中山幸子 稲沢光子 佐藤悦春 北原久滋 田中一郎 北原源弘 清水和美 西沢つね子 遠山吟子 三原一之 櫻井松子 降旗貞子 北沢芳子 倉科 清 高橋寿春 高橋洋一 降旗猛司 細田三子 有賀 悟	酒井正子 平林真紀 中山益美 普沢和美 山崎直子 宇留賢忠則 原田 曠 竹内誠治 松沢雄幸 清水和美 三原一之 櫻井松子 降旗貞子 北沢芳子 倉科 清 高橋寿春 太田千代美 宮沢茂子	吉岡 明 岩野 潔 北原久滋	高橋克恵 扇田さなえ 竹村喜美子 宇留賢忠則 清水和美 宮沢茂子 竹内誠治 三原一之 櫻井松子 松沢雄幸 原田 曠 松岡 寛	高橋克恵 扇田さなえ 竹村喜美子 宇留賢忠則 川上丕子 高橋要女 清水和美 宮沢茂子 竹内誠治 三原一之 櫻井松子 松沢雄幸 原田 曠 松岡 寛 北沢芳久	近藤朋子 宇賀村節子 風間夏枝 山下千幸 飯島公子 稲玉美紀 山崎明子 山本和美 坂田恵美子 市川ちず子 半田純子 丑山和江 大林久美子 滝沢みゆき

## 指導者・協力者

原山 智・戸沢充則・小林達雄・篠崎健一郎・倉科和夫・島田哲男・鈴木 勝・赤羽貞幸・荒井今朝一

## 第2節 発掘と整理の方法

## 1 発掘作業の方法

埋文センターでは調査法の共通認識と調査の統一性を図るため「遺跡調査の方針と手順」を作成し、これに沿って発掘調査を行っている。本調査もこれに従った。

## 遺跡の名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。記録の便宜のため大文字のアルファベットの3文字を用いた遺跡記号を使用している。3文字の先頭のアルファベットは長野県を9分割した地区を示し、2・3文字目は遺跡名を省略したものである。

・肩平 (かたひら) F K A	・窪平 (くぼひら) F K G
・菅ノ沢 (すげのさわ) F S G	・神明原 (しんめいはら) F S H
・寺海戸 (てらがいと) F T G	・乳川石堤 (ちがわせきてい) F C S
・まねき (まねき) F M A	・山の神 (やまのかみ) E Y M (F Y M)

## 遺構の名称と遺構記号

遺構記号は記録の保存活用のために便宜上つけたものである。本遺跡で該当する遺構記号を以下に記す。

S B : 竪穴住居跡、竪穴建物跡 2m以上を目安として平面形が方形・円形・楕円形・多角形の掘り込み。

竪穴住居跡・竪穴状遺構。本書では住居跡あるいは竪穴住居跡と表記した。

S T : 掘立柱建物跡 S Bより平面形が小さく、単独もしくは、ほかの遺構と関係が認められない掘り込み。

S K : 土坑、竪穴(貯蔵穴・粘土採掘溝・塵芥処理穴など)

S H : 集石

S D : 溝、掘、水路

S F : 焼土集中

S X : 性格不明遺構、その他

L M : ロームマウンド

## 検出と精査

遺構検出：試掘については状況に応じてトレンチによる調査を行う。

本調査は試掘結果によるが、面的調査とする。必要最低限の遺構検出作業は重機により、調査研究員の指示のもと重機従事者に指示する。その後、調査補助員と共に遺構の検出を行い、検出後は調査研究員の指示によって遺構の掘り下げ作業を行うものとする。

竪穴住居跡：竪穴住居跡の検出後は遺構の埋没過程を知るための断面を状況に応じて掘り残しながら調査する（最終段階で撤去する）。竪穴住居跡の調査方法については遺跡の環境や残存状況、土質の状況によりさまざまに変化するが、状況に応じてそのつど対応しなければならない。状況によっては検出面より上面からサブトレンチを入れたり、柱穴が床面だけでなく遺構外に存在する可能性も考えて調査にあたるなど、その都度、調査研究員同士で状況を把握しながら調査にあたりたい。

掘立柱建物跡：遺物が伴わないことので多い遺構であることから、検出面の状況や周囲の出土遺物について注意を払わなければならない。柱穴内に柱痕が見られる場合などは半割を優先するか、上場の輪郭を優先するかを考えて調査にあたった。

土坑：本調査を行った肩平遺跡や菅ノ沢遺跡では土坑(S K)や柱穴が数多く検出されたが、その調査方

法については遺跡から出土した遺物を観察して、何がどこまで必要かを判断して調査にあたった。

遺物の取り上げ：遺物については、遺構出土の遺物と検出面やトレンチの遺物とは分けて分類する予定で調査にあたったが、実情は遺物の出土数が少量であったためと土壌の移動が顕著ではなかったため同様に扱った。

## 記録

基準点設定：調査区は国土交通省国土地理院の旧測量法による日本測地系・平面直角座標系第8系（ $X = 0.0000, Y = 0.0000$ ）を基点にして次のとおり区分した。

ア 200 × 200 mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査範囲を覆う最小限度に留め、原則として北東から南西にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字を用いる。

イ 大々地区を40 × 40 mの25区画に分割し、大地区とする。大地区は北西から南東へA～Yの順に計25個の大文字アルファベットを用いる。

ウ 大地区をさらに8 × 8 mの25区画に分割し、中地区とする。中地区も北西から南東へ1～25のアラビア数字を付け、遺構測量、遺物取り上げの基準線とする。

エ 大地区を2 × 2mの400区画に分割し小地区とする。小地区は、大地区の北西角を起点としX軸上に西から東へA～Tのアルファベットを、Y軸上に北から01～20の数字を与え40分割し、両者を合わせて小地区名とする。遺構外遺物等の取り上げの基準とした。

本調査時の大々地区・大地区・中地区などの測量杭は測量業者に委託し実施した。

測量：測量遺構の測量は簡易測量により、調査研究員および実測指導を経た作業員が行った。実測用の測量杭は、表土剥ぎ後、遺構の確認された区域で8mグリッドを設定した。その他、遺構が検出されなかった地区ごとに適宜最小限の杭にとどめ設定した。平面図は測量業者の単点図をもとに結線し、それ以外の個別遺構図面（1：20）は人手による実測を行った。全体図・地形コンタ図等は測量業者の単点測量図面（1：200、1：100）を加工して使用した。

写真：発掘調査中の遺構等の写真撮影では、67判・35mm判カメラを使用した。67判カメラは将来大判に引き伸ばすことが予想されるものに使用し、基本的な遺物出土状態や遺構写真については35mm判カメラを使用した。カラーについてはポジフィルムを使用した。

## 2 整理作業の方法

### 遺構の整理

発掘作業で作成した調査範囲の地形図、遺構配置図および個別遺構図は、基礎整理で明かな記載ミスについて点検し、朱書き訂正ののち図面台帳に登録した。本格整理では、原図をスキャンしてから報告書掲載縮尺でデジタルトレースを行った。遺構図のデジタルトレースは、デザインソフトに慣れた補助員ならば、人手によるトレースと遜色ない仕上がりを期待できることがわかった。

遺構写真は、基礎整理段階でモノクロネガフィルムについては遺跡ごと撮影順にアルバムへ貼付し、ポジフィルムは遺跡ごと遺構番号順にスライドケースへ収納して、写真台帳へ登録した。本格整理では、報告書へ掲載する写真を、撮影内容と写真の状態によって選別し、プリントまたはポジフィルムをスキャンした。

### 遺物の整理

土器と石器は基礎整理段階ですべて洗浄し、遺跡記号、遺構記号・番号または出土グリッド記号・番号を注記し、必要に応じて出土地点ナンバーを加筆して台帳登録を行った。本格整理に入り、土器は遺

跡毎遺構単位に遺物観察を行いながら破片の接合を試み、接合可能な破片はセメダインCで接着し、薄ワカブルで補強を行った。遺物観察結果から実測図化に適している個体を選別し、人手による実測または拓本を行った。

金属器は基礎整理段階でとりあえず台帳登録を済ませ、本格整理段階で県立歴史館のX線撮影によって金属器本体の状況を観察した後サビを除去し、人手による実測を行った。

遺物図のトレースも当初はデジタルトレースを試みたものの、遺構図のトレースに熟達した補助員でも意図した表現に仕上げるのはかなり難しいとわかり、人手によるトレースに切り換えた。トレース後はスキニングによってデジタルデータを作成した。

遺物写真は、実測図を作成したもののうち、図化では表現したい厚みや質感、細部の調整や剝離等を報告すべき遺物に限定して、委託業者にデジタル撮影させた。デジタル写真については、汎用性や可塑性、耐用性等の問題点が指摘されているが、遺物の場合、撮り直しがきくという点を考慮しデジタル編集への作業工程短縮を優先した。

### 指導・委託

普ノ沢遺跡出土の鉄生産関連遺物については、遺跡に近接する大町市長畑遺跡から出土した鉄製品を大町市教育委員会が川鉄 J F E テクノリサーチ株式会社へ委託して分析した経緯があるため、埋文センターとしても既出データとの比較を行うため同社へ委託して分析を行った。また、相伴した炭化材は、火力燃料となった木材の樹種とそれを伐採した年代や季節を判別するため、株式会社パリオ・サーヴェイに委託して分析を行うことにした。

そのほか、あづみの公園内の自然環境は前大町山岳博物館長の倉科和夫氏、歴史環境は大町市文化財審議委員会会長篠崎健一郎氏および大町市教育委員会生涯学習課島田哲男氏、石器石材については信州大学理学部地質科学科の原山智氏にご教示いただいた。

### 報告書の作成

報告書作成時間の短縮と印刷費の低廉化、PDFファイルの作成・公開等を考慮して、遺構・遺物の図面、写真、文章等すべての記録をデジタル化し、レイアウトソフトで編集を行った。ただし、この作業は埋文センターとして組織だった取り組みが行われていないことや編集者個人がレイアウトソフトに熟練していないなどの理由から、かえって作業が遅滞する事態を招いた部分が否めない。今後の検討課題である。

## 第2章 遺跡の環境

### 1 地理環境

あづみの公園予定地内の遺跡群は大町市の南西、北アルプスにそびえる餓鬼岳の東麓に位置する。標高は海拔856.8～689.4mを測る。大町市西山山麓には槍ヶ岳を源とする高瀬川が北流し、その支流である乳川は北アルプスの餓鬼岳（西部山地）から流下し、東に向かって傾斜する神明原扇状地を形成している。本遺跡群はその扇状地の扇尖部から扇端部に位置する。

発掘調査区の基本となる土壌は黄褐色ローム層で、谷部や凹地など地形によっては水成作用による黄褐色砂礫層の堆積をみることができる。また、ローム層と砂礫層が互層に観察される地点があることなどからも、2次・3次堆積が水成作用によってもたらされたであろうことが推察される。地山や遺構の覆土には礫や砂花崗岩を多く見ることができる。これら石材は餓鬼岳や有明山を中心として観察されている「有明花崗岩」であることから、北アルプス当該山系起源の崖錐によりもたらされたものと考えられる。

### 2 自然環境

大町市の年平均気温は9.2℃、冬期には12月～3月の期間平均最低気温が-3.5～-7.6℃と著しく低い。このような低温の気候下では生育する植物にも影響を与えている。標高が100m上がるごとに気温が0.6℃下がるという前提をもとに植生配列の垂直分布帯が設定されているが、神明原扇状地帯はカシ・シイなどの「常緑広葉樹林帯」の上位に展開する「落葉広葉樹林帯」の下部に対応している。「落葉広葉樹林帯」下部は、クリ・コナラ林を中心とする植生で標高600～1,000mに位置している。ちなみに上位に展開する「落葉広葉樹林帯」上部は、ブナ・ミズナラ林を代表とする植生で、標高1,000～1,500mの位置に展開し、下部とは一線を画している。



第2図 山の神遺跡周辺のクリ・コナラの林

扇状地の現在の植生は、針葉樹のアカマツ・カラマツに混ざって広葉樹のクリ・コナラがみられる針広混交林である。また、標高の高い扇頂部に行くほどアカマツは減り、クリ・コナラなどの広葉樹の比率が高くなっている。

アカマツ林は、花崗岩の砂礫土壌を主とする貧栄養地の扇状地内によく見られている。しかし、有用材としての価値がなくなってくると、アカマツはクリ・コナラ類にとって代わり、コナラ林へと移り変わっている。また、カラマツ林は、戦後まもない頃の造林によって積極的に植えられたが、その後の輸入材におされて顧みられなくなり、放置されたままの状態である。クリ・コナラ林は、日本の高度成長期が始まるまでは新炭材としての利用価値が認められ、有用材として人の手が入り維持管理されていたが、現在では雑木林として放置されたままになっている。

### 3 歴史環境

大町市は長野県の北西部（通称：大町市・北安曇郡の略から大北地区と呼ばれている）に位置する。そして、



地形的環境・歴史的な背景から大町市は大きく大町・平・社・常盤の4つの地区に区分することができる。

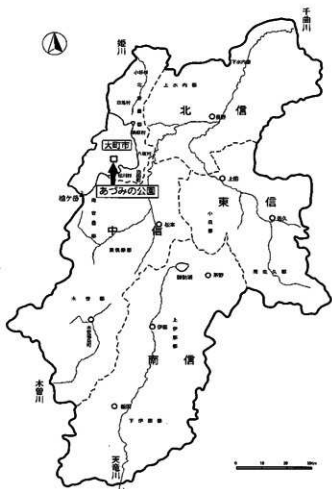
全体的に見ると旧石器、縄文時代早期・前期を中心とした遺跡は平地区の仁科三湖の周囲や各地区の山麓・山間部に多く存在している。中でも平地区の祟史跡上原遺跡は竪穴住居跡こそみつかっていないが、環状柱穴列や建物と考えられる柱穴が見つかるなど、大規模な縄文前期の集落の存在が確認されている。また、縄文中期を中心とした遺跡は山麓に点在し、常盤地区の菅ノ沢遺跡、まねき遺跡、長畑遺跡、平地区の一津遺跡など山麓部での狩猟・採集や仁科三湖周辺での漁労を主体とした生活が行われていたことがうかがわれる。

弥生時代に入ると遺跡は平坦地の多い社地区や大町地区に多く確認される。また、古墳時代には弥生時代と同じ地や平坦地に集落がみられるようになり、東山山麓や小熊山山麓には古墳が築かれるようになる。さらに、奈良・平安時代には集落数の増大と低地開発の進展により、古墳時代よりさらに低地への進出が進み、中世では仁科氏により進められたといわれる新田開発・治水を伴った低地（平坦地）の定着型集落が展開している。

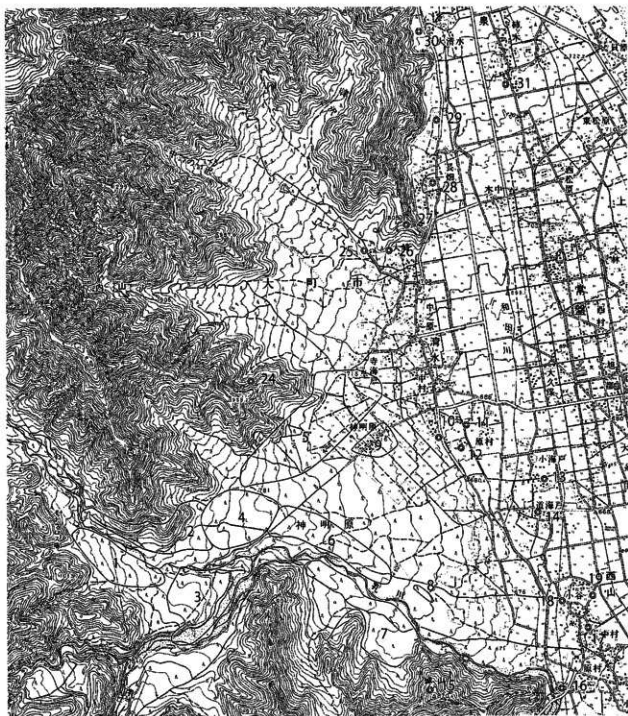
今回報告する遺跡群のある常盤地区は、高瀬川扇状地や氾濫原、神明原扇状地上にあり、西部山麓に接している。そこには窪平遺跡、まねき遺跡、桐山遺跡、肩平遺跡、寺海戸遺跡、菅ノ沢遺跡、乳川石堤、神明原遺跡の9遺跡が数えられる。さらに清水城跡の尾根を越えた北側の内山沢や中の沢の氾濫原にある北山平遺跡、大崎遺跡の2遺跡を加えると11遺跡余りを数えることとなる。

神明原扇状地上の遺跡で今のところ最も古いといわれるのは縄文時代早期で、昭和22年に土器片が採集された桐山遺跡と山の神遺跡（平成15年報告）があげられる。縄文時代前期には他の大町市域と同様に遺跡数が増加する傾向にあり、桐山遺跡、まねき遺跡、窪平遺跡、菅ノ沢遺跡、山の神遺跡などがあげられる。縄文時代中期になるとさらに遺跡数が増し、まねき遺跡、菅ノ沢遺跡、山の神遺跡、窪平遺跡、神明原遺跡、いば岩遺跡、北山平遺跡、出水遺跡などがある。縄文時代後期には神明原扇状地の北方に連なるように続く中ノ沢や内山沢の形成した扇状地の端部に大崎遺跡や、未調査ではあるが大規模な遺跡と予想されている北山平遺跡がある。他には菅ノ沢遺跡、がにあらし遺跡など、遺跡数の減少が見られる。縄文時代晩期は、神明原扇状地とその周辺では菅ノ沢遺跡、長畑遺跡、北山平遺跡が知られているが、遺跡数だけでなく規模自体も縮小傾向にあると考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、低地への指向ということからか、縄文時代の遺跡数に比べて希少で規模も小さいようである。弥生時代では硯岩遺跡、奈良・平安時代では西山遺跡、道海戸遺跡、小海戸遺跡、長

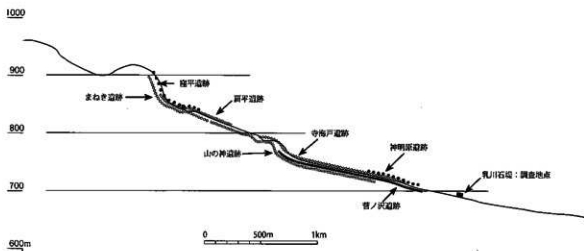


第3図 大町、国営アルプスあづみの公園位置図



- |              |          |          |          |
|--------------|----------|----------|----------|
| 1 窪平         | 2 まねき    | 3 桐山     | 4 岡平     |
| 5 寺海戸        | 6 山の神    | 7 菅ノ沢    | 8 乳川石堤   |
| 9 神明原        | 10 イボ岩   | 11 清水郷倉跡 | 12 清水居館跡 |
| 13 小海戸       | 14 道海戸   | 15 西山城跡  | 16 硯岩    |
| 17 松庵寺跡      | 18 西山居館跡 | 19 五社神社跡 | 20 常光寺跡  |
| 21 須沼氏居館跡(Ⅱ) | 22 下一本木  | 23 北村    | 24 清水城跡  |
| 25 北山平       | 26 大崎    | 27 長畑城跡  | 28 長畑    |
| 29 がにあらし     | 30 西の原   | 31 伝・経塚  |          |

第4図 大町常盤地区遺跡分布図



第5図 あづみの公園内 遺跡垂直分布図

畑遺跡、がにあらし遺跡があげられる。公園内の遺跡では菅ノ沢遺跡で弥生時代後期の土器片が出土しているほか、古墳時代や古代では菅ノ沢遺跡で竪穴住居跡・製鉄遺構（中世）が確認され、肩平遺跡からは中世の掘立柱建物跡が確認調査されている。

中世では、神明原扇状地末端から高瀬川にかけての平坦面に清水氏居館跡、須沼氏居館跡などの居館跡があり、長畑遺跡、小海戸遺跡、道海戸遺跡など、それを取り巻くように集落がある。公園内の遺跡では菅ノ沢遺跡や肩平遺跡で山茶碗や中国青磁の破片が出土し、まねき遺跡、肩平遺跡周辺に清水寺が存在したと伝えられる。具体的な遺構では肩平遺跡からは中世の掘立柱建物跡が確認調査されている。また、扇状地の北側の城山には仁科氏の被官の一人といわれる矢口氏のもと伝えられる西山城跡がある。その後、戦国時代には武田信玄によって仁科氏は滅ぼされ、後には小笠原氏松本藩の所領となり、常盤地区は松川組に属している。

参考文献

『大町市史』第二巻 1985年大町市史編纂委員会

## 第3章 肩平遺跡

## 第1節 調査の概要

肩平遺跡は、乳川扇状地の扇頂部、餓鬼岳から流れ下って乳川に合流する親川の左岸、標高約770mのテラス上、まねき遺跡の下段に位置する。

乳川扇状地は神明原といわれているやや平坦な扇状地である。乳川扇状地自体は谷が深くいくつかの小扇状地や崖錐があって、このような谷のふところ深くにも縄文時代の遺跡のいくつかある。

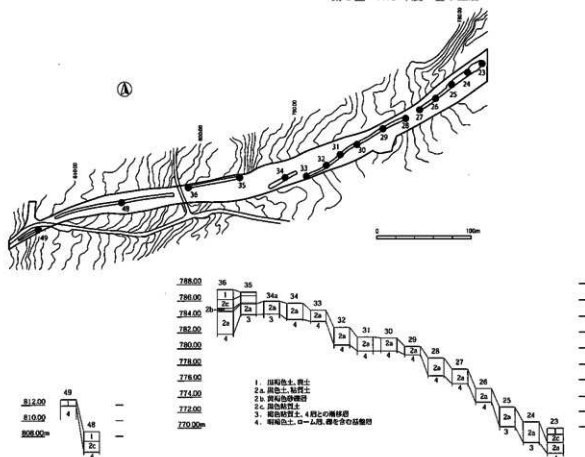
## 調査の経過

平成13年、まねき遺跡と接するテラス上の平坦地で試掘を行った結果、肩平遺跡分で遺構と考えられる落ち込みが確認されたため本調査を行った。その結果、遺物は少量出土するに留まり、遺構と考えられた落ち込みはロームマウンドなど人為的なものではないと判断された。

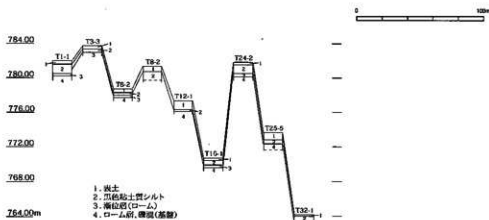
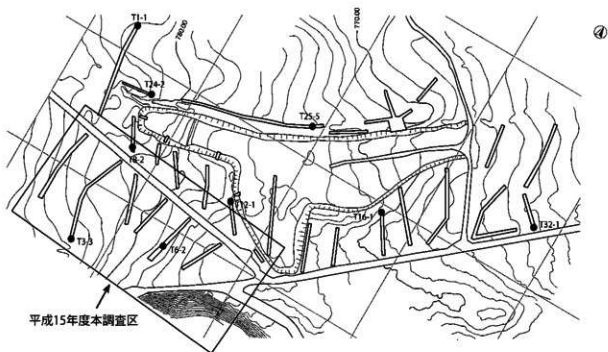
この章で取り上げるのは平成14年度に試掘調査を行い、平成15年度に本調査を実施した箇所である。遺跡の総面積は255,000㎡で、集落遺跡の一部12,520㎡(5%)を発掘調査した。



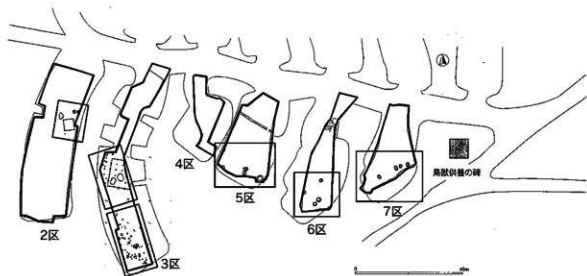
第6図 H15年度 基本土層



第7図 H13年度 肩平・まねき遺跡試掘トレンチ配置及び柱状図



第8図 H14年度 肩平遺跡試掘トレンチ配置図及び柱状図



第9図 H15年度 肩平遺跡本調査全体図

## 第2節 遺構と遺物

## 1 掘立柱建物跡と出土遺物

## 1号掘立柱建物跡 (ST1) (第11図、PL4)

3区調査区内の東壁寄りで確認された。5間×3間以上の総柱の掘立柱建物跡で、一部調査区外におよんでいるため5間×4間あるいは5間×5間となる(P1の東方向)可能性もある。また、建物跡内の南寄りでは焼土跡(SF4)を検出した。掘り込みは浅く10cm弱であり、底面に若干の焼土を確認することができた。建物跡に伴う可能性が考えられる。本調査区の検出面から約1袋の土器が出土している。その時期は13世紀後半～14世紀前半の青磁、白磁および播り鉢の破片である。

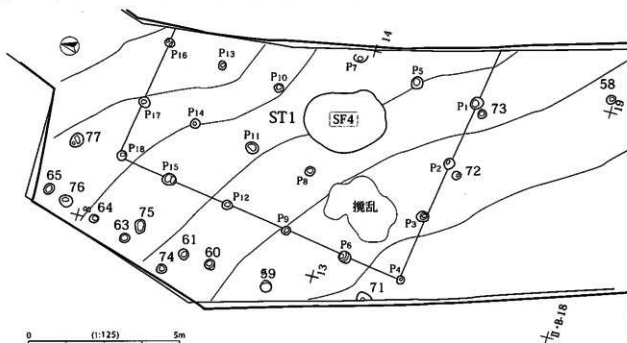
## 2号掘立柱建物跡 (ST2) (第13図、PL5)

2区の調査区東壁寄りで確認された。2間×2間で、桁行では北側の柱穴の間隔が南側より広く、北側の梁行の中央部に柱穴が確認されていないなど特徴となる点がみられる建物跡である。遺構の時期は、覆土の状態が1号掘立柱建物跡と類似していたこと、1号掘立柱建物跡と同一検出面であることから、13世紀後半～14世紀前半の可能性が考えられる。

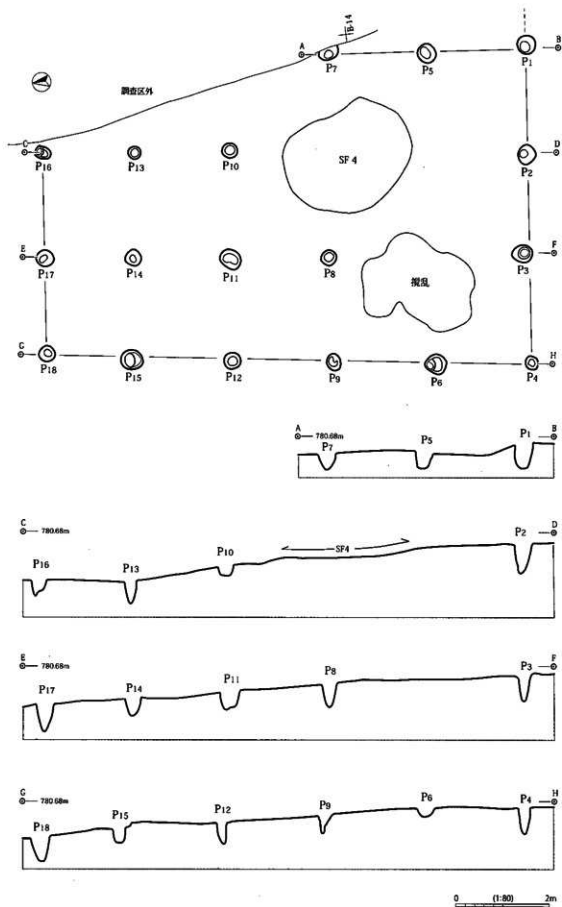
## 2 柱穴群と出土遺物

土坑は柱穴状をしており、1号掘立柱建物跡周辺に分布するものと3区南端から6グリットにわたって分布するものに分けられる。整理上便宜的に前者を柱穴群1、後者を柱穴群2とした。柱穴群1・2の間は約8mの距離があり、その間に遺構は検出されなかった。柱穴群1の土坑は柱穴群2よりも浅い傾向がある。柱穴群1に関しては1号掘立柱建物跡との関係を、柱穴群2に関しては焼土跡との関係をどうとらえるかが課題として残っている。両者共にそれぞれ性格の違いがあるものと考えられる。

覆土の堆積状況はほぼ単層。土層にはぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する砂質土をベースにして明黄褐色(10YR6/8)のブロックを含むものが多い。炭化物を含む土坑も少数認められた。



第10図 3区北側の遺構分布

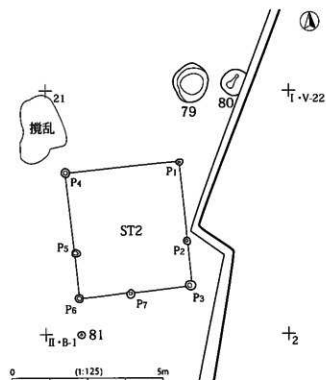


第11図 1号掘立柱建物跡 (ST1)

柱穴群の時期であるが、検出時に13世紀後半～14世紀前半に所属する青磁、播鉢および捏鉢などの破片が出土していることから、1号掘立柱建物跡同様に13世紀後半～14世紀前半の所産と考えたい。

### 柱穴群1 (SK 59～61・63～65・71～77) (第10図、PL7)

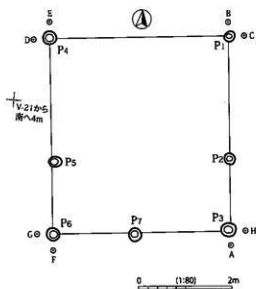
本柱穴群は1号掘立柱建物跡の西側あるいは南側に展開している。それぞれの柱穴間に切り合いは認められない。掘立柱建物跡の西壁にあたる柱穴列とはほぼ平行にSK 59・60・61・75・76・65が並んでいる。その中でSK 59と60は深さが50cm近くあり、それ以外の柱穴は20cm内外とやや浅めである。また、SK 77はSK 59～65の列から直角に曲がるのが想定できる柱穴である。ノキあるいはヒサシを想定することも可能であるが、限られた範囲の観察で断定することは難しい。また、掘立柱建物跡の南壁の柱穴列に添うようにSK 72・73が存在する。深さが若干浅めであるがP1・P2に関係する施設の柱穴と考えられる。SK 64・63・74は掘立柱建物跡の西壁に平行というにはやや難があるが用地の境、あるいは杭などが想定できる。SK 58は前述の柱穴群とはやや離れた単独の柱穴であった。



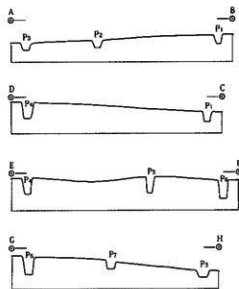
第12図 2号掘立柱建物跡 (ST2) の周辺

### 柱穴群2 (SK 15～17・19～22・24～30・32・34～36・38～41・43・44・46～55・62・68～70) (第14図、PL7)

柱穴群2は柱穴配置・構造などが不明確であったため、掘立柱建物跡としての認定までには至らなかった。本柱穴群の平面プランは円形、楕円形、または不整形。深さについては14～74cmと不揃いで、直径も大小さまざまである。発掘調査の段階で掘立柱建物跡の想定を試みたが、組み上げるまでは至っていない。本柱穴群には焼土跡が



第13図 2号掘立柱建物跡 (ST2)





3カ所検出されたが、いずれも1号掘立柱建物跡と4号焼土跡のような関係に取り込むことは不可能であった。検出面から判断して13世紀後半～14世紀前半の所産と考えたい。

### 3 土坑と出土遺物

土坑の種類には2種認められる。1種類は柱穴状のやや小振りな掘り込み、もう1種類はやや大きめで楕円形（不整形のものも認められる）を基調とするものである。遺構検出については地山と遺構覆土の色調や混入粒子の違いによって検出した。

#### 1号土坑（SK1）（第16図、PL6）

遺構の平面プランは楕円形で、底面は長方形を呈する。断面形は底面から土坑下部～中部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、そこから土坑上部までは外側に開く。また、底面中央に円形の小ピットが認められる。規模は長さ154cm、幅118cm、深さ86cm（底面中央の小ピットの深さを加算すると100cmを測る）。遺物が出土していないため時期の特定は難しいが、検出面の基本層序から縄文時代中期後葉以降と推測される。

#### 2号土坑（SK2）（第17図、PL6）

平面プランはやや不整気味の楕円形。断面形は底面から土坑上部にかけて、斜めに立ち上がる。底面中央に楕円形の小ピットが認められる。規模は長さ146cm、92cm、深さ88cm（底面中央の小ピットの深さを加算すると103cmを測る）。覆土中から頁岩製の剥片が1点出土した他は出土遺物がなく、検出面の基本層序から縄文時代中期後葉と推測される。

#### 3号土坑（SK3） 位置：7区（第18図）

遺構のほとんどが調査区外のため、形状や規模は不明である。出土遺物がなく時期決定が難しいが、検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降と推測される。

#### 4号土坑（SK4）（第19図、PL6）

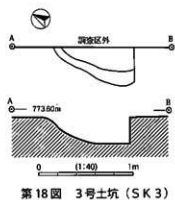
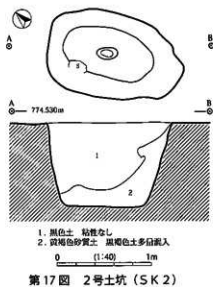
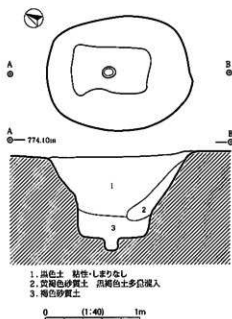
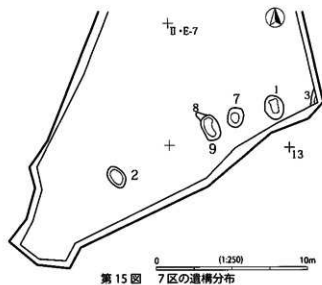
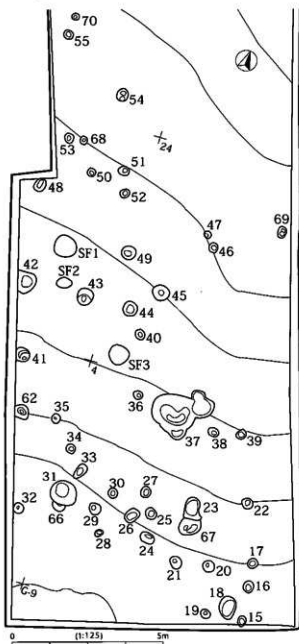
遺構の平面プランは円形。断面形は底面から土坑上部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長さ120cm、118cm、116cmを測る。覆土中から縄文時代中期後葉以降と思われる土器が1点出土しているが、文様が不明瞭なためそれ以上の細分はできない。検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が妥当といえる。

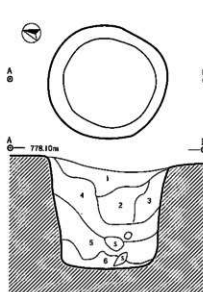
#### 5号土坑（SK5） 位置：6区（第20図、PL6）

平面プランはやや不整な円形。断面形は底面から土坑上部にかけて、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長さ148cm、幅148cm、深さ54cmを測る。覆土中より縄文時代中期後葉の土器が1点、および頁岩製の剥片5点、黒曜石製の剥片1点が出土した。覆土から出土した土器の時期から判断して、縄文時代中期後葉と考えられる。

#### 6号土坑（SK6） 位置：6区（第21図）

約1/2以上が調査区外で完掘できなかったため、遺構の平面プランは不明（円形か?）である。断面形は底面から土坑上部にかけてそのまま斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模は長さ・幅ともに不明、深さは計測できる範囲では50cm。覆土中より縄文時代早期前葉の土器（縄文式並行か）が1点

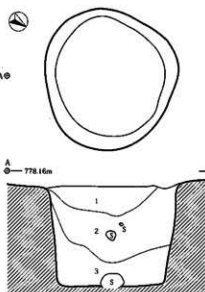




1. 黒色土 粘性なし、しまり強い。
2. 褐色土 小礫をわずかに含む。
3. 灰黄褐色土 小礫・黄褐色ブロックをわずかに含む。
4. 灰黄褐色土 3層より黄褐色ブロックを含む量が少ない。
5. 灰黄褐色土 4層より黄褐色ブロックを多く含む。
6. 褐色土 小礫をわずかに含む。

0 (1:40) 1m

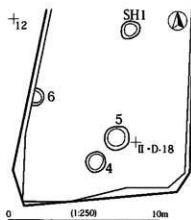
第19図 4号土坑 (SK 4)



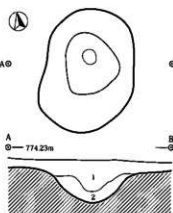
1. 10YR2/1 灰色 粘性なし、しまり弱。φ=1cmの小礫をわずかに含む。
2. 10YR5/1 褐色土 粘性なし、しまり弱。φ1~20cmの礫を少量含む。
3. 10YR6/6 明黄褐色 粘性なし、しまり弱。細灰土ブロックを少量含む。φ~2cmの礫を少量含む。

0 (1:40) 1m

第20図 5号土坑 (SK 5)



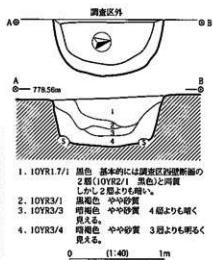
第22図 6区の遺構分布



1. 10YR3/2 黄褐色 砂質 粘性なし、しまり弱。
2. 10YR3/0 黄褐色

0 (1:40) 1m

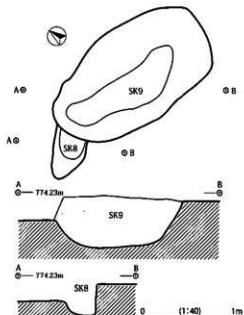
第23図 7号土坑 (SK 7)



1. 10YR1.7/1 褐色 基本的には調査区西縁断面の2層(10YR2/1、灰色)と同質。しかし2層よりも細い。
2. 10YR3/1 黒褐色 やや砂質
3. 10YR3/3 暗褐色 やや砂質 4層よりも暗く見える。暗褐色 見える。
4. 10YR3/4 明黄褐色 やや砂質 3層よりも明るく見える。

0 (1:40) 1m

第21図 6号土坑 (SK 6)



第24図 8・9号土坑 (SK 8・9)

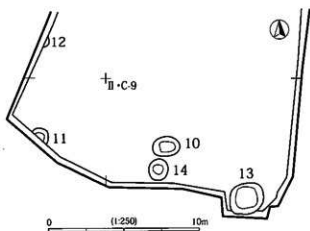
出土 (第39図)した。6区では縄文時代中期後葉以降と思われる土坑が検出されているが、それと面的に分けることができず、早期前葉・中期後葉ともに同一の検出面 (基本層序の第5層) で検出した。

#### 7号土坑 (SK 7) (第23図, P. 6)

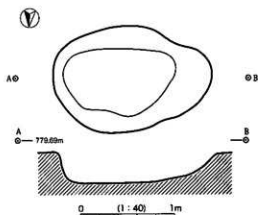
遺構の平面プランは不整気味な楕円形。断面形はU字状を呈する。規模は長さ127cm、幅98cm、深さ37cmを測る。時期決定の根拠となり得る遺物の出土や遺構の重複関係がないことから時期は不明であるが、検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が推測される。

#### 8号土坑 (SK 8) (第24図)

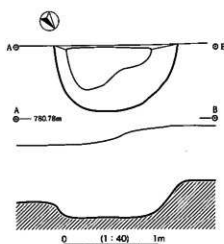
遺構の平面プランは不整気味だがSK 9に切られているので不明。断面形は一方の壁が斜めに、一方の壁が垂直気味に立ち上がる。底面は傾く。規模は幅34cm、深さ34cmを測る。SK 9と重複関係にあり、



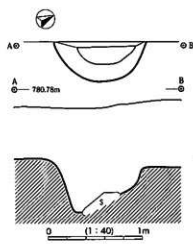
第25図 5区の遺構配置



第26図 10号土坑 (SK 10)



第27図 11号土坑 (SK 11)



第28図 12号土坑 (SK 12)

断面の観察からSK 8をSK 9が切ると判断した。時期決定の根拠となり得る遺物がなく、また新旧関係からも判明しないが、検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が推測される。

#### 9号土坑 (SK 9) (第24図、PL 6)

遺構の平面プランは不整気味な楕円形。断面形U字形。底面は西へわずかに傾く。規模は長さ181cm、幅105cm、深さ55cmを測る。8号土坑と同様に時期の決定に欠くが、検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が推測される。覆土中からは2次加工のある剥片石器が出土している(第40図、PL 1)。

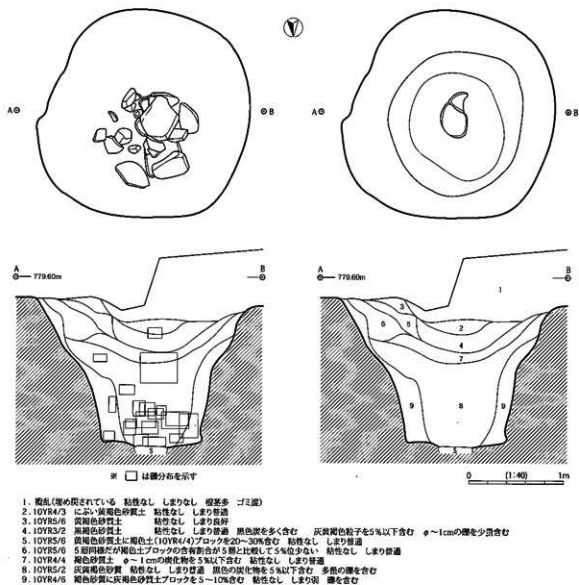
#### 10号土坑 (SK 10) (第26図、PL 7)

遺構の平面プランはやや不整な楕円形。断面形は東壁が底面からやや傾きながら直線的に立ち上がる。もう西壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はわずかに丸みを帯びる。規模は長さ164cm、幅112cm、深さ32cmを測る。

覆土中から土器が2点出土しているが、胎土の特徴から縄文時代中期と考えられる。

#### 11号土坑 (SK 11) (第27図)

遺構の平面形は、約1/2以上が調査区外で完掘できなかったため不明(円形か?)。断面は平坦な底面から土坑上部にかけてそのまま斜めに立ち上がる。規模は長さ・幅ともに不明、深さは計測できる範囲で



第29図 13号土坑 (SK 13)

は40cmを測る。検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が推測される。

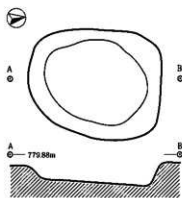
#### 12号土坑 (SK 12) (第28図)

遺構の平面形は、約1/2以上が調査区外で完掘できなかったため不明(円形か?)。断面形は調査された範囲ではU-V字状を呈する。規模は長さ・幅ともに不明。深さは計測できる範囲で52cmを測る。時期決定の根拠となり得る遺物が存在しないが、検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が推測される。

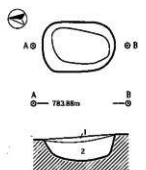
#### 13号土坑 (SK 13) (第29図、P L 7)

試掘調査で検出され、竪穴住居跡の可能性が指摘された遺構である。遺構の平面プランは円形。断面形は平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。土坑中部において緩い段が形成される。底面中央の一部には地山の礫が露出している。規模は長さ228cm、幅216cm、深さ154cmを測る。

覆土は、9つに分層された。第8・9層下部(底面直上~約1mの深さ)に拳大~人頭大の礫が集中して検出された。礫はSK 13以外の土坑覆土やSK 13周辺の検出面に存在しない点から、人為的に投棄されたものと考えられる。



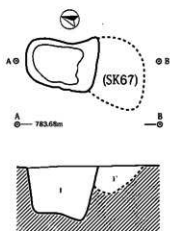
第30図 14号土坑 (SK 14)



1. 黒褐色 10YR3/2 砂質  
粘性なし、しまり経過  
2. にぶい黄褐色 10YR4/3  
砂質粘性なし

0 (1:40) 1m

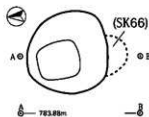
第31図 18号土坑 (SK 18)



1. にぶい黄褐色砂質 10YR4/3 粘性なし  
10YR6/8明黄褐色のブロックを少し含む。

0 (1:40) 1m

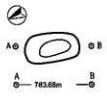
第32図 23号土坑 (SK 23)



1. にぶい黄褐色砂質 10YR4/3

0 (1:40) 1m

第33図 31号土坑 (SK 31)



0 (1:40) 1m

第34図 33号土坑 (SK 33)



0 (1:40) 1m

1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質

第35図 42号土坑 (SK 42)

縄文時代後期前半の土器、半完形2個体と破片が2点出土している。出土位置を見ると覆土第2～4層出土と第8～9層出土にまとまる傾向がある。出土状態は集中して検出された礫の上部と下部に分類できたが、接合の結果、出土層位による時期差は判別できなかった。土坑の機能が停止した後、礫を投棄する過程の中で土器も投棄されたと考えられる。また、礫が土坑の底面直上で多く検出された点は、土坑機能が停止した後、あまり時間をおかず投棄されたと考えられる。

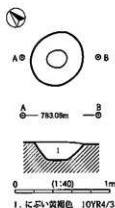
#### 14号土坑 (SK 14) (第30図)

遺構の平面プランは楕円形。断面形は底面から土坑上部に向かって斜めに立ち上がる。底面は平坦であるが北に傾斜する。規模は長さ138cm、幅114cm、深さ24cmを測る。

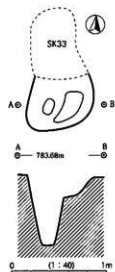
覆土から縄文土器の破片が1点出土しているが、細片のため時期は不明(胎土の感じからすれば中期後葉か)である。検出面を基本層序から考えあわせると縄文時代中期後葉以降と考えられる。

#### 18号土坑 (SK 18) (第31図)

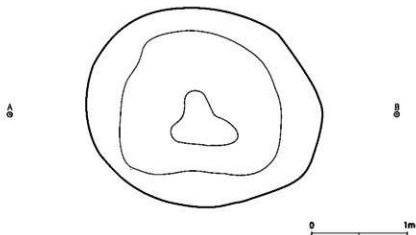
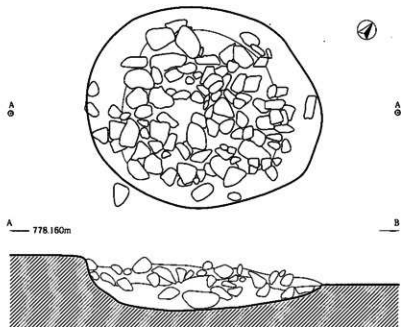
遺構の形状は、平面プランは不整な楕円形。断面形は底面から傾きながら(やや外側に反る)立ち上がる。底面は丸味を帯びる。規模は長さ78cm、幅52cm、深さ28cmを測る。土坑の検出面から13世紀後半～14世紀前半の青磁、搦鉢あるいは捏鉢などの破片が出土しているので、SK 18も13世紀後半～14世紀前半の所産と考えたい。SK 18は柱穴群2のSK 15～17・19・20・21などに接して位置する。



第36図 45号土坑 (SK 45)



第37図 67号土坑 (SK 67)



1. 10YR2/1 黒色 粘性なし しまり弱 多〜1cmの軟モ少含む
2. 10YR3/1 黒褐色 粘性なし しまり弱 炭を多量に含む

第38図 集石跡 (SH 1)

これらのSKが掘立柱建物跡などの柱穴であったとすれば、SK 18はその付属施設となる可能性もあろう。

### 23号土坑 (SK 23) (第32図)

遺構の形状は、平面プランは不整長方形。壁は底面から若干傾きながらまっすぐに立ち上がる。底面は段をもつ。規模は長さ74cm、幅56cm、深さ72cmを測る。検出面が掘立柱建物跡や柱穴群の検出面と同じであること、覆土の状況が掘立柱建物跡や柱穴群と同じであることから13世紀後半〜14世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

### 31・66号土坑 (SK 31・66) (第33図)

遺構の平面プランは円形。断面形は底面から壁が傾きながら立ち上がる。底面は傾いている。規模は長さ86cm、幅84cm、深さ40cmを測る。検出面を基本層序から考えあわせると13世紀後半〜14世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

## 33号土坑 (SK 33) (第34図)

遺構の平面プランは楕円形。断面形は底面から傾きながら壁がまっすぐに立ち上がる。底面は平坦である。規模は長さ56cm、幅30cm、深さ72cmを測る。検出面を基本層序から考えあわせると13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

## 42号土坑 (SK 42) (第35図)

平面形はSKの一部が調査区外におよぶため不明だが、調査された部分から推定すれば円形であろうか。断面形は調査された部分では、底面から斜めに壁が立ち上がり、全体的に皿状を呈する。底面は平坦。規模は長さ74cm、幅不明、深さ18cmを測る。

焼土跡2カ所(SF1・2)がSK42に接して位置するが、建物跡として組めない点や焼土跡に付随するものとも考えられないことから本跡の機能は不明である。

遺構No	地区名	遺構分類	長さc m	幅c m	深さc m	備考	遺構No	地区名	遺構分類	長さc m	幅c m	深さc m	備考
SK01	7区	土坑	154	118	100	縄文中期後葉	SK45	3区	土坑	58	54	20	13世紀後半～14世紀前半
SK02	7区	土坑	146	92	103	縄文中期後葉	SK46	3区	柱穴群2	34	28	30	13世紀後半～14世紀前半
SK03	7区	土坑	不明	不明	不明	縄文中期後葉	SK47	3区	柱穴群2	24	24	40	13世紀後半～14世紀前半
SK04	6区	土坑	120	118	116	縄文中期後葉	SK48	3区	柱穴群2	52	36	32	13世紀後半～14世紀前半
SK05	6区	土坑	148	142	54	縄文中期後葉	SK49	3区	柱穴群2	48	46	33	13世紀後半～14世紀前半
SK06	6区	土坑	不明	不明	50	縄文早期前葉	SK50	3区	柱穴群2	30	28	48	13世紀後半～14世紀前半
SK07	7区	土坑	127	98	37	縄文中期後葉	SK51	3区	柱穴群2	34	34	26	13世紀後半～14世紀前半
SK08	7区	土坑	不明	34	34	縄文中期後葉	SK52	3区	柱穴群2	32	26	14	13世紀後半～14世紀前半
SK09	7区	土坑	181	105	55	縄文中期後葉	SK53	3区	柱穴群2	24	30	43	13世紀後半～14世紀前半
SK10	5区	土坑	164	112	32	縄文中期後葉	SK54	3区	柱穴群2	44	34	47	13世紀後半～14世紀前半
SK11	5区	土坑	不明	不明	40	縄文中期後葉	SK55	3区	柱穴群2	32	30	20	13世紀後半～14世紀前半
SK12	5区	土坑	不明	不明	52	縄文中期後葉	SK56						欠番
SK13	5区	土坑	228	216	154	縄文中期後葉	SK57						欠番
SK14	5区	土坑	138	114	24	縄文中期後葉	SK58	3区	土坑	26	25	42	
SK15	3区	柱穴群2	38	26	51	13世紀後半～14世紀前半	SK59	3区	柱穴群1	42	32	49	13世紀後半～14世紀前半
SK16	3区	柱穴群2	40	32	50	13世紀後半～14世紀前半	SK60	3区	柱穴群1	38	32	48	13世紀後半～14世紀前半
SK17	3区	柱穴群2	36	28	45	13世紀後半～14世紀前半	SK61	3区	柱穴群1	36	32	19	13世紀後半～14世紀前半
SK18	3区	土坑	78	52	28	13世紀後半～14世紀前半	SK62	3区	柱穴群2	52	不明	35	13世紀後半～14世紀前半
SK19	3区	柱穴群2	36	30	45	13世紀後半～14世紀前半	SK63	3区	柱穴群1	34	32	17	13世紀後半～14世紀前半
SK20	3区	柱穴群2	38	38	65	13世紀後半～14世紀前半	SK64	3区	柱穴群1	30	28	17	13世紀後半～14世紀前半
SK21	3区	柱穴群2	44	38	31	13世紀後半～14世紀前半	SK65	3区	柱穴群1	38	32	19	13世紀後半～14世紀前半
SK22	3区	柱穴群2	36	32	50	13世紀後半～14世紀前半	SK66	3区	土坑	不明	42	14	13世紀後半～14世紀前半
SK23	3区	土坑	74	56	72	13世紀後半～14世紀前半	SK67	3区	土坑	70	不明	75	13世紀後半～14世紀前半
SK24	3区	柱穴群2	48	34	48	13世紀後半～14世紀前半	SK68	3区	柱穴群2	28	26	25	13世紀後半～14世紀前半
SK25	3区	柱穴群2	38	38	30	13世紀後半～14世紀前半	SK69	3区	柱穴群2	36	30	30	13世紀後半～14世紀前半
SK26	3区	柱穴群2	54	40	30	13世紀後半～14世紀前半	SK70	3区	柱穴群2	26	26	22	13世紀後半～14世紀前半
SK27	3区	柱穴群2	40	30	25	13世紀後半～14世紀前半	SK71	3区	柱穴群1	不明	不明	22	13世紀後半～14世紀前半
SK28	3区	柱穴群2	28	20	30	13世紀後半～14世紀前半	SK72	3区	柱穴群1	30	30	33	13世紀後半～14世紀前半
SK29	3区	柱穴群2	38	40	74	13世紀後半～14世紀前半	SK73	3区	柱穴群1	28	26	12	13世紀後半～14世紀前半
SK30	3区	柱穴群2	34	32	38	13世紀後半～14世紀前半	SK74	3区	柱穴群1	32	32	21	13世紀後半～14世紀前半
SK31	3区	土坑	86	84	40	13世紀後半～14世紀前半	SK75	3区	柱穴群1	52	32	20	13世紀後半～14世紀前半
SK32	3区	柱穴群2	36	36	30	13世紀後半～14世紀前半	SK76	3区	柱穴群1	44	40	16	13世紀後半～14世紀前半
SK33	3区	土坑	56	30	72	13世紀後半～14世紀前半	SK77	3区	柱穴群1	48	40	37	13世紀後半～14世紀前半
SK34	3区	柱穴群2	32	30	28	13世紀後半～14世紀前半	SK78	3区	土坑	90	不明	41	
SK35	3区	柱穴群2	30	28	20	13世紀後半～14世紀前半	SK79	2区	土坑	132	116	66	
SK36	3区	柱穴群2	30	26	16	13世紀後半～14世紀前半	SK80	2区	土坑	92	不明	40	
SK37	3区	土坑	198	168	96	13世紀後半～14世紀前半	SK81	2区	土坑	23	23	11	
SK38	3区	柱穴群2	32	30	26	13世紀後半～14世紀前半							
SK39	3区	柱穴群2	36	32	28	13世紀後半～14世紀前半	SF1	3区	焼土跡	76	74	-13	
SK40	3区	柱穴群2	34	30	54	13世紀後半～14世紀前半	SF2	3区	焼土跡	48	34	-5	
SK41	3区	柱穴群2	54	50	36	13世紀後半～14世紀前半	SF3	3区	焼土跡	70	64	2	
SK42	3区	土坑	74	不明	18	13世紀後半～14世紀前半	SF4	3区	焼土跡	274	216	19	
SK43	3区	柱穴群2	60	52	55	13世紀後半～14世紀前半							
SK44	3区	柱穴群2	52	46	28	13世紀後半～14世紀前半							

第3表 H15年度 厩平遺跡土坑一覧



検出面を基本層序から考えあわせると13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

#### 45号土坑（SK 45）（第36図）

平面プランは円形。断面形は平坦な底面から斜めに壁が立ち上がり、全体的に皿状を呈する。規模は長さ58cm、幅54cm、深さ20cmを測る。検出面を基本層序から考えあわせると13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

#### 67号土坑（SK 67）（第37図）

平面プランは不整形円形。断面形は底面から若干傾きながら壁が立ち上がる。壁の一部に段があり、全体的には柱穴状を呈する。しかし、柱穴とした他のSKより大形で長さ70cm、幅不明、深さ75cmを測る。

検出面を基本層序から考えあわせると13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

### 4 集石跡（SH1）（第38図、PL5）

調査6区検出。平成14年度の試掘調査で確認されていた遺構である。平面プランは円形。断面形は平坦な底面からほぼ垂直に壁が立ち上がり、皿状を呈する。規模は長さ124cm、幅105cm、深さ29cmを測る。1層には2層に比べ被熱礫が多量に混入している。炭化物の混入する量は2層の方が多い。土坑の底面中央に一部被熱面が認められるが、壁面に被熱の痕跡は認められない。出土遺物はない。検出面を基本層序から考えると縄文時代中期後葉以降が推測される。

### 5 遺構外の出土遺物

#### 土器（第39図、PL1）

1は、6号土坑から出土した。薄手の押型文土器口縁部の小片である。連続する山形の押型文が横位に施されている。縄文時代早期前半の樋沢式と考えられる。

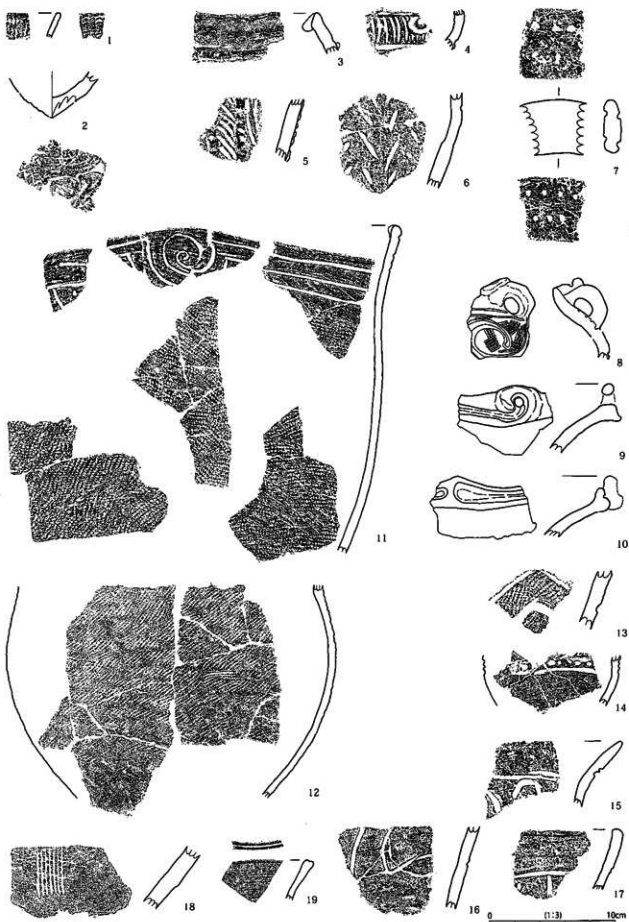
2は検出面から出土した。撚糸文系の尖底土器底部片である。胎土には多量の繊維が含まれている。文様は認められないが縄文時代前期初頭と考えられる。

縄文時代中期後葉の土器が5点出土しているが、検出面（6、7）あるいは試掘調査（3、4、5）によるものである。

3は、内傾する口縁部で、口唇部は無文であるがその下位には、おそらく口縁部を一周する横位の沈線と隆帯がみられる。縄文時代中期後葉の樽型の器形を呈する土器と考えられる。4は、口縁部下位、頸部に近い部位がキャリパー形を呈する土器の小片と考えられる。2本の横位沈線の間に縦位の沈線が施されている。また、渦巻き文が沈線によって施されている。縄文時代中期後葉と考えられる。5は、刻み目のあるやや太めの隆帯が縦方向に2本貼り付けられている。地文には斜行する沈線が施される。胴部中位の小片で、曾利もしくは唐草文の影響を受けた縄文時代中期後葉と考えられる。6は、曾利もしくは唐草文の影響を受けたと考えられる胴部片である。特徴的な矢羽状の沈線が施されている。縄文時代中期後葉と考えられる。7は、両面に刺突の施される把手の小片である。該当する部位が不明であるが、縄文時代中期（唐草文系）と考えられる。

縄文時代後期前半の土器は13号土坑の4点11～14以外は、検出面から6点8～10、15～17が出土している。

8は、注口土器の把手の部分と考えられる。把手の上部には突起が施されていたようだが欠落している。胴部には地文の縄文（無節）が施され、その上には沈線による渦巻き文がみられる。9は、鉢形土器の口

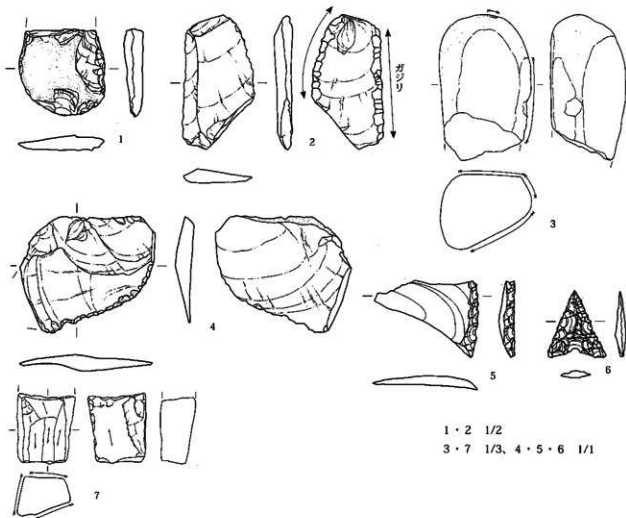


第39回 高平遺跡 出土土器

縁部片で、沈線と隆帯で渦巻きが描かれている。渦巻きの中心には貫通する小孔が穿たれている。内外面共に器面に地文はみられない。10は、浅鉢形の口縁部片でやや波状を呈している。口唇部は肥厚し2条の沈線が施されている。胴部の内外面に文様はない。11は、波状口縁の深鉢形土器である。口縁部には無文の上に3条の横位沈線と渦巻き文が施されている。頸部以下は地文の縄文が施されている。12は、口縁部と底部を欠く胴部片で地文の縄文が施されている。13は、やや厚手の胴部片で、2条の山形沈線の間に縄文が地文として施されている。一部磨消縄文が認められる。14、やや小振りな深鉢の胴部片で、2条の沈線の間に大きめの刺突が施されている。胴部下位は無文である。15は、外反する口縁部片で口唇部は無文で下位に横位の沈線と曲線が施されている。器壁は薄手である。16は、外傾する胴部片で沈線によるやや雑な曲線が施されている。15と16は同一個体であろうか。17は、口唇部が無文の口縁部片で、下位には横位の沈線と縦位の沈線がみられる。

中世（13世紀後半～14世紀前半）では3区検出面から小破片が出土しているが、図化できたのは18の摺り鉢と19の東海系こね鉢のみである。図化できなかった破片の中には龍泉窯系青磁の破片がある。18は、摺り鉢の小片で、内面に1単位のやや深い条線（卸目）が施されている。使用のためと考えられる摩耗が認められる。戦国期の山茶碗と考えられる。19は、東海系こね鉢の小片で、肥厚した口唇部先端には1条の細沈線が施されている。時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

石器（第40図、P L I）



1・2 1/2  
3・7 1/3、4・5・6 1/1

第40図 肩平遺跡 出土石器

遺構から出土した石器は、5の2次加工のある剥片でそれ以外は検出面からの出土である。

1、2は打製石斧で凝灰岩製である。1は摩耗が顕著な刃部片、2は刃部を欠く、裏面の微細な剥離は剥離面が新鮮なことから“ガジリ”と考えられる。

3は花崗斑岩の磨石で表面・裏面・右側面に擦痕、摩耗が顕著である。上面に敲打痕が観察される。

4、5は凝灰岩製の2次加工のある剥片石器で、石材の緻密さは5より4の方が細密といえる。4は不定形剥片を素材としている。刃部は表面からの敲打による鋸歯状の刃部を形成している。5は石器の一部と思われるが表裏からの敲打により鋸歯状の刃部を形成している。

6は黒曜石製の凹器な石鏃で、丁寧な調整が施されている。

7は比較的粗い砂岩製である。表裏面と左側面に跡切根が認められる。粗砥石に近い性格の砥石と考えられる。

番号	遺構	層	出土位置	備考	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	出土年月日	石材
1	グリット	5区	検出面	打製石斧	45.0	45.0	10.0	27.77	—	凝灰岩
2	グリット	7区	検出面	打製石斧	70.0	38.0	10.0	22.48	—	凝灰岩
3	グリット	6区	検出面	磨石	115.0	73.0	55.0	690.75	01・10・12	花崗斑岩
4	グリット	7区	検出面	2次加工	31.0	36.0	5.0	3.85	—	凝灰岩(かなり細密)
5	SK09	留土		2次加工	20.0	27.0	4.0	1.51	—	凝灰岩(細粒)
6	グリット	5区	検出面	石鏃	17.5	15.0	3.0	0.40	—	黒曜石
7	グリット	3区	検出面	砥石	56.0	46.0	28.0	105.31	—	砂岩

第4表 肩平遺跡 出土石器一覧

### 第3節 小結

肩平遺跡は、これまで大町市教育委員会等が行ってきた調査によって、縄文時代の遺物散布地として周知されてきた。本調査でも、それを裏付けるように早期前半、前期初頭、そして中期後半から後期前半の土器が各種石器と共に出土した。縄文時代にあつて本遺跡は定住の場というよりも、狩猟生産の場との色彩が濃い。ただ、周知された遺跡範囲に比べ、今回の調査範囲はその一割にも満たない。今後、居住域が確認される可能性は残されている。

今回の調査において最大の成果は、中世前期鎌倉時代に比定される掘立柱建物跡が確認されたことにある。検出した掘立柱建物跡は最低でも2棟を数え、周辺の柱穴群を加えればさらにその数は増える。しかも、1号掘立柱建物跡は柱間5間×5間の可能性をもち、火床を伴う大形建物である。

神明原扇状地の扇端には、仁科氏の被官清水氏や須沼氏等の居館や山城が点在し、それらを取り巻く集落が広がっている。しかし、扇中央に近い樹林帯のなかでは、これまで中世の居住地を確認することができなかった。伝承によると、この神明原扇状地の奥部は、中世仁科氏の牧が広がっていたといわれている。また、肩平遺跡に北接するまね倉遺跡や寺海戸遺跡には、旧清水寺跡が遺されているともいう。そうしてみると、仁科氏滅亡後の近世以降は顧みられることもなかったこの乳川中流域にも、中世鎌倉・室町期までは生産の場あるいは信仰の場として利用されていた一時期があったものと考えられる。

この調査では、確認された中世掘立柱建物跡等の性格とその背景に迫りうる資料を得ることはできなかった。地域史解明に向けた重要な課題である。今後、周辺地域の徹底した考古学的調査を抛り所に追究していく必要があろう。

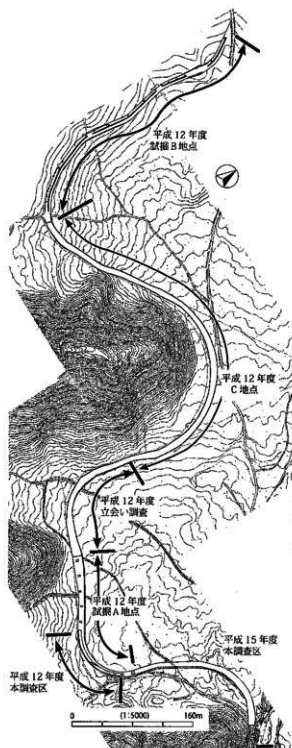
## 第4章 菅ノ沢遺跡

### 第1節 調査の概要

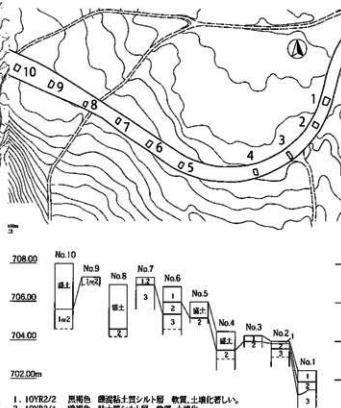
菅ノ沢遺跡は、乳川右岸の扇状部、西山城跡北側の裾野に位置する。大町市教育委員会が行った詳細分布調査等の結果、縄文時代中期の遺跡として周知されている。また、大洞山山麓寄りでは中世の遺物も出土している。遺跡総面積はおよそ329,000㎡であるが、今回は城山山麓に建設予定の公園周回道路部分を対象にして調査を行った。

公園周回道路は城山の北麓を南東から北西に向けて蛇行するが、平成12年度は、まず道路予定地の中央部分のA地点（第42図）と北西端B地点（第43図）の試掘調査に入った。

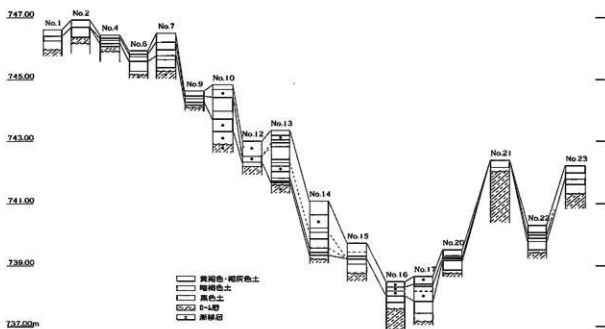
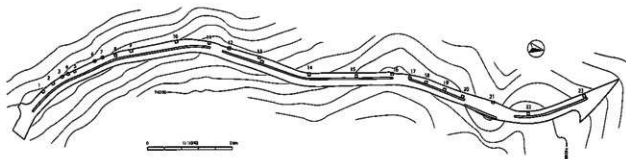
A地点No.3～5グリッドでは、遺構と考えられる落ち込みが検出され、縄文・弥生土器片が少量出土したため、この部分を中心に遺構が検出される可能性の



第41図 菅ノ沢遺跡調査区配置図



第42図 H12年度 試掘A地点トレンチ配置及び柱状図



第43図 H12年度 試掘B地点トレンチ配置及び柱状図

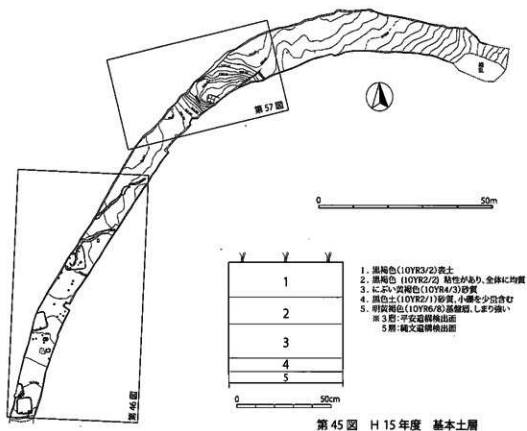
ある箇所の本調査を行った(第55図)。その結果、土坑9基と溝1条を確認し、縄文中期初頭の土器片と石器が出土している。

B地点は全体に高低差が著しく、基盤のローム層に達しても遺構・遺物は確認されなかったため、本調査は行わなかった。

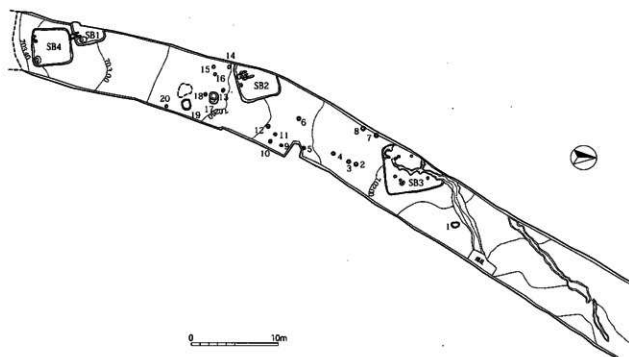
A地点とB地点に挟まれたC地点の南東側は、踏査時点ですでに切土工事が完了し、盛土による道路建設が行われている。C地点の北西側については工事を中止し、鷲鷹類の保護期間解禁後に試掘調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

続く平成15年度の調査は、平成12年度A地点のさらに南東側延長線上で行った。平成12年度の試掘調査によって、この箇所は遺構の広がり予測されたため、直ちに重機を使って黒褐色の表土除去に取りかかった。総延長120m、幅員10m、面積は約1,200㎡である。検出した遺構は竪穴住居跡4軒、土坑20基、溝状遺構2条で、この他に調査区南東端部の沢から製鉄関係の遺物が出土している。

調査区内には、表土下に粘性のある黒褐色土(2層)、砂質のにぶい黄褐色土(3層)が堆積している。本遺跡の古代の遺構はほとんどこの3層上面で検出した。3層の下は小礫を含んだ黒褐色土(4層)を挟んでしまりの強い明黄褐色土(5層)へ続くが、12年度調査で確認した縄文時代の土坑はこの層を掘り込んでいる。



第44図 H15年度菅ノ沢遺跡本調査全体図



## 第2節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

#### 1号竪穴住居跡（S B 1）（第47・48図、P L 10）

15年度調査区の南端部東壁際で検出した。

平面プランはおおよそ南北方向にやや長い隅丸長方形と思われる。面積は5.65㎡（推定）である。4号竪穴住居跡と重複関係にあり、本跡より4号竪穴住居跡の方が新しいことが土層の断面観察から判明した。

床面は全面がやや硬くなっていたが、貼床は認められなかった。床面上に柱穴はない。周溝が北壁から東壁際に巡っている。

カマドは袖を石で組んでおり、住居南側壁の中央よりやや東側に設置されている。燃焼部中央に支脚石が残存している。煙道は2段に掘り込まれている。カマド左側には楕円形を呈する土坑1基を床面精査で検出したが、内部からは顕著な貯蔵物などは出土しなかった。

遺物は南西コーナー付近のほぼ床面直上の位置から、土師器の坏・甕が出土している。良好な一括資料と考えられる。その他、床面直上あるいは10cmほど浮いた状態で若干の遺物が出土している。

坏類の1、2はミガキが多用され器肉は薄く丁寧な仕上げである。これに対し4はやや歪んで内外面のナデが施されるが、底部付近に刷毛目が残る器肉は厚みをもつ。6の甕は外面にナデが施され、内面には輪積み痕を消すように縦方向のやや粗いミガキが施されている。5は土師器の小型甕の完形である。外面の頸部下位にはヘラ削りの痕跡がみられ、内面の頸部下位に横ナデが施されている。口縁部は横ナデ、外面胴部はナデが施されている。全体にゆがみがあり輪積みによって成形されたものと思われる。1号住居跡は古墳時代中期（5世紀半ば～後半）と考えられる。該期の甕は長胴化にいたる前で、そのためか本跡からも甕類の出土はみられなかった。

#### 2号竪穴住居跡（S B 2）（第49・51図、P L 11）

15年度調査区の中央やや南寄り東壁際で検出した。

平面プランは隅丸方形といえる。面積は14.55㎡（推定）である。

床面に貼床や硬化面は認められない。掘り込んで整えたのみと考えられる。床面上に柱穴・周溝はない。

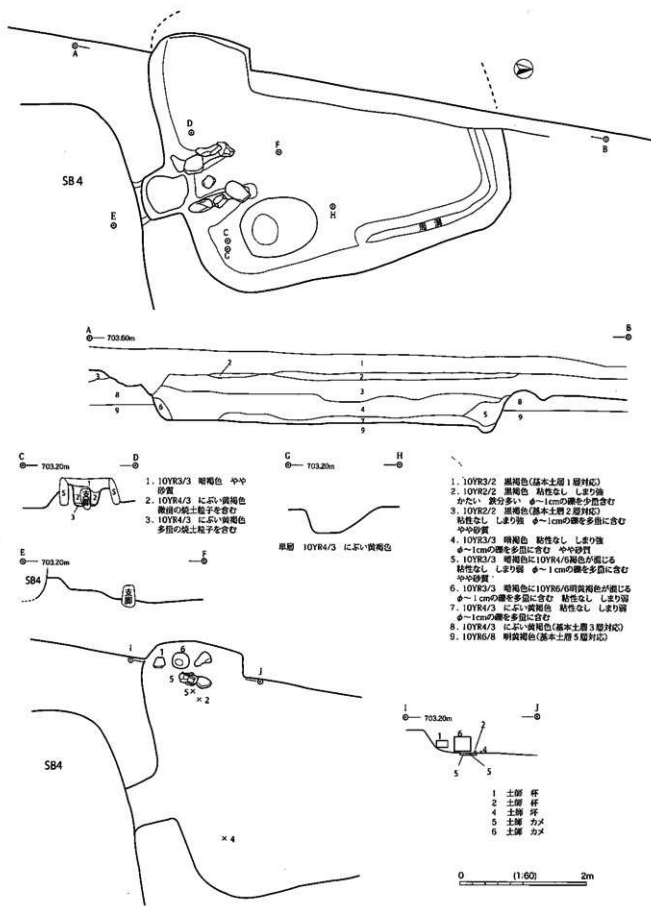
カマドは袖部を石で組んで、住居南壁の中央よりやや西寄りに構築されている。燃焼部中央に支脚石が残存していた。図中の網掛けの礫は袖部と奥壁を構築した礫で原位置をほぼ留めていると思われる。煙道はすでに削平されていたためか検出できなかった。カマド東側の床面上に楕円形を呈する貯蔵穴と考えられる土坑1基を検出した。土坑の長軸は66cm、深さは42cmである。

遺物はカマド右脇のほぼ床面上から出土。良好な一括資料である。その他、覆土（主に第3・4層）から若干の遺物が出土している。

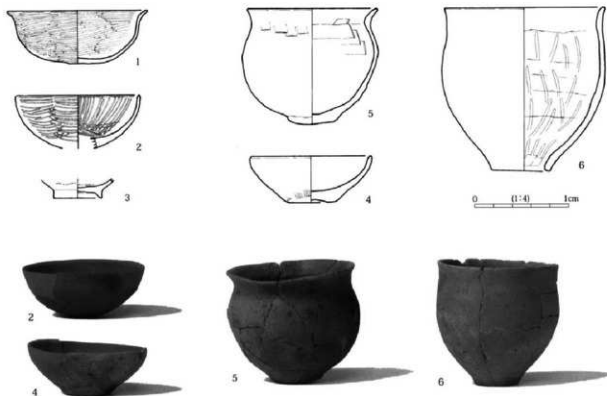
7は椀と呼ぶには坏部のやや浅い高台坏、8は付け掛けの灰釉陶器、9、10も坏部が浅い無台坏である。共に薄手の土師器の破片で、内面底部には磨きが認められる。薄手であるが焼成は良好で胎土は緻密である。11のロクロ甕は9世紀中葉を特徴づける小型甕といえる。12は須恵器の長頸壺で、口縁部と胴部以下を欠いている。

これらの土器から本竪穴住居跡は9世紀中葉と考えられる。





第47図 1号竪穴住居跡 (SB1)



第48図 1号竪穴住居跡（SB1）出土土器

## 3号竪穴住居跡（SB3）（第50・52図、P L 12）

平面プランは剛丸長方形といえる。面積は27.35㎡（推定）である。1号溝状遺構（SD1）が本跡の床面を掘り込んでいるため本跡の方が古い。

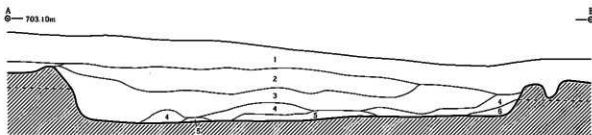
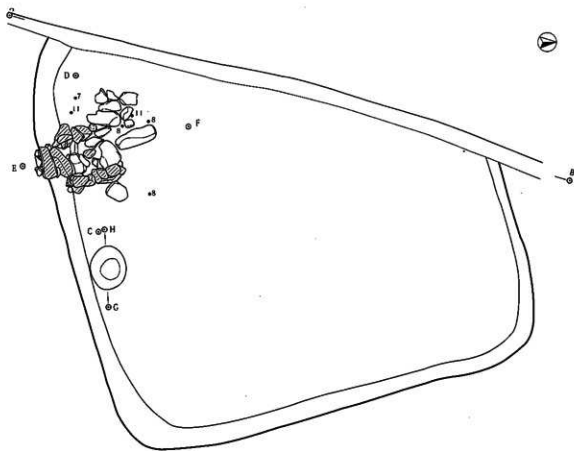
床面は貼床や硬化面が認められないことから、地山を掘り込んで整えたのみと考えられる。また、床面上では9基の柱穴が確認できた。周溝はない。

カマドは住居南側壁の西側コーナー付近および東側コーナー付近にそれぞれ1基確認した。住居の切り合いや建て替えとも考えられたが、覆土や床面に切り合いの痕跡が認められず、同一壁の同一床面上に2基が構築されていたので、両者とも本跡に伴うカマドと判断した。2基のカマドが同時に機能していたかどうかは不明である。

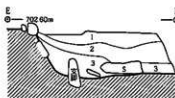
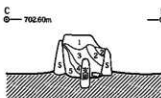
西側コーナー付近のカマドは、礫がみられたので石組みカマドと考えられる。下部に地山（基本3層）を袖状に作り出し、その上部に石組みでカマドを構築している。この袖部の地山部分直上から、同じ法量の土師器環3個体（図面No. 1～3）が伏せた状態で出土した。環を置いたものとすれば、カマド本体の石組みを意図的に破壊したことになり、カマドの機能停止時に石組みを破壊し、土師器を伏せて置くといった祭祀的な行為がなされた可能性を指摘できる。焚口付近から火床に掛けてある3個の礫は、礫面がほぼ水平なので置かれたものであろうか。煙道は検出できなかった。

東側コーナー付近のカマドも礫がみられるので石組みカマドであったと考えられるが、煙道もなく、袖部も残っていないことから、カマドは機能停止後に破壊されたと考えられる。何らかの理由で北側コーナーにカマドを作り替え、本カマドは機能終了後家の一部と化したものと考えられる。以上のことは3号竪穴住居跡が廃棄された時点での事項で、2基のカマドが同時に使用されていた時期があるかどうかは不明である。東側コーナーカマド付近から羽釜が出土しているが、それをもって両者の併存とまでは言及し難い。

遺物では西側コーナーのカマドで出土した土師器のほか、東側コーナーのカマド付近では土師器の羽釜



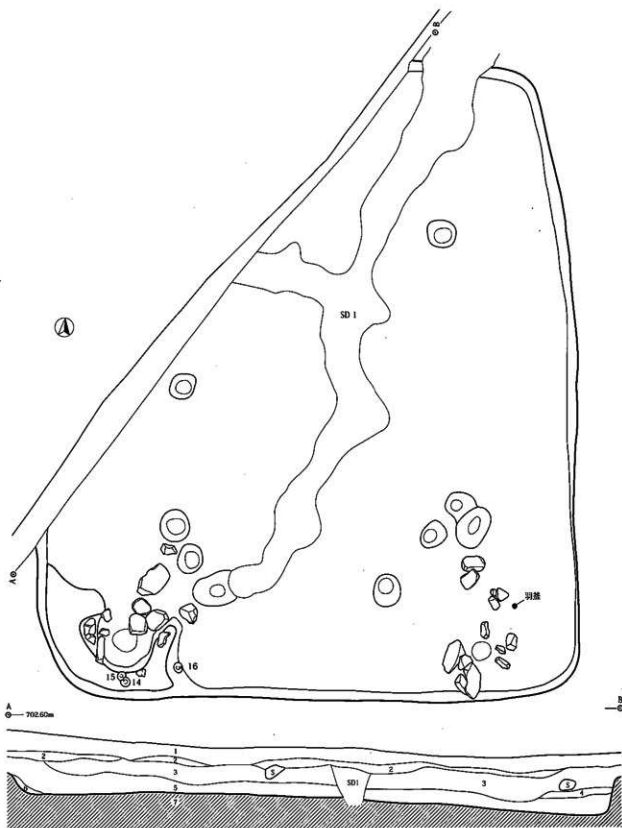
- |            |     |      |                                      |
|------------|-----|------|--------------------------------------|
| 1. 10YR3/2 | 黒褐色 | 粘性なし | しまり弱(基本層作:層対比)砂質 根・葉多い。              |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | 粘性なし | しまり強 かない 鉄分多い φ~1cmの小礫を含む。           |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | 粘性なし | しまり弱 やや砂質 φ~0.5cmの小礫を少量含む。           |
| 4. 10YR2/2 | 黒褐色 | 粘性なし | しまり強 粘土・灰を多量に含む。(灰・炭・土器に粘土がかぶる部分多い)。 |
| 5. 10YR3/3 | 暗褐色 | 粘性なし | しまり弱 やや砂質 粘土粒子を少量含む。                 |
| 6. 10YR3/3 | 暗褐色 | 粘性なし | しまり弱明黄褐色ブロック(10YR6/8)を少量含む。          |



- |            |     |                          |
|------------|-----|--------------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色 | やや砂質。                    |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | やや砂質 粘土粒子を含む。            |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色 | やや砂質 粘土粒子及び灰を含む。(2層よりも多) |
| 4. 10YR3/3 | 暗褐色 | やや砂質 粘土粒子を多量に含む。         |
| 5. 10YR3/3 | 暗褐色 | やや砂質 粘土を多量に含む黄褐色ブロックを含む。 |

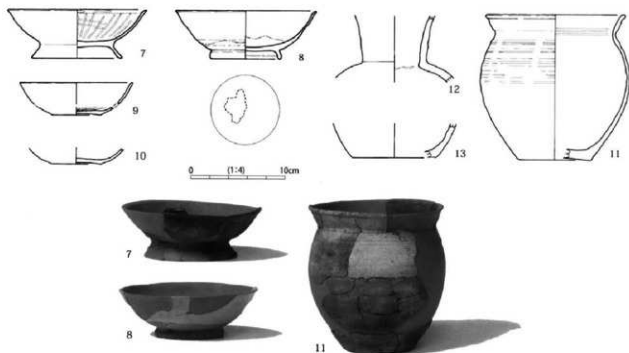
0 (1:60) 2m

第49図 2号竪穴住居跡(SB2)

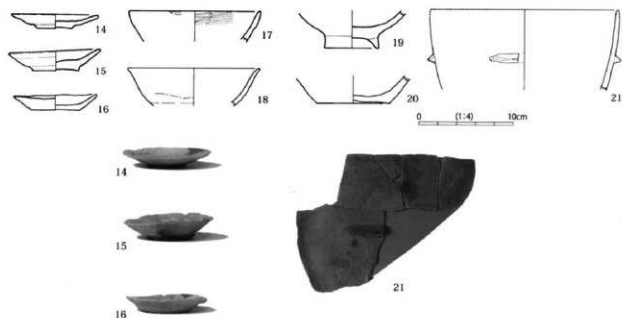


- |            |      |      |      |                         |                       |
|------------|------|------|------|-------------------------|-----------------------|
| 1. 10YR3/3 | 暗褐色  | 粘性なし | しまり弱 | 樹・葉多い                   | 黄土。                   |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色  | 粘性なし | しまり強 | かたい炭分多い。                | φ~1cmの礫を少量含む。         |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色  | 粘性なし | しまり強 | やや砂質                    | φ~1cmの礫を多量に含む。        |
| 4. 10YR3/3 | 暗褐色  | 粘性なし | しまり強 | かたい。                    |                       |
| 5. 10YR3/3 | 暗褐色  | 粘性なし | しまり強 | やや砂質                    | φ~1cmの礫を多量に含む。        |
| 6. 10YR3/2 | 黒褐色  | 粘性なし | しまり弱 | 明黄褐色(10R3/6)砂礫が多量に含まれる。 |                       |
| 7. 10YR6   | 明黄褐色 | 粘性なし | しまり弱 | 砂質                      | φ~5cmの礫を多量に含む 基本土層5期。 |

第50図 3号竪穴住居跡 (SB3)



第51図 2号竪穴住居跡(SB2)出土土器



第52図 3号竪穴住居跡(SB3)出土土器

が出土した。この他、覆土(主に第5層)から若干の遺物が出土している。

14、15、16の土器器の皿と19の高台杯、そして21の甗が時期的な特徴といえる。

14、15、16は皿部に横ナデが施され、底部には糸切り痕の残る完形の皿である。16は灯明皿として用いられたようで、口唇部にタール状の付着物がみられる。17は内黒の椀の破片で、口唇部に煤が付着している。18は灰釉陶器、19は口縁部を欠く高台杯で、内黒が施されている。21は土器甗片でおそらく4単位になると思われる突起が胴部に認められ、全体に横ナデが施されている。11世紀代に特徴的な甗で関東北部や北陸地方に散見できる。

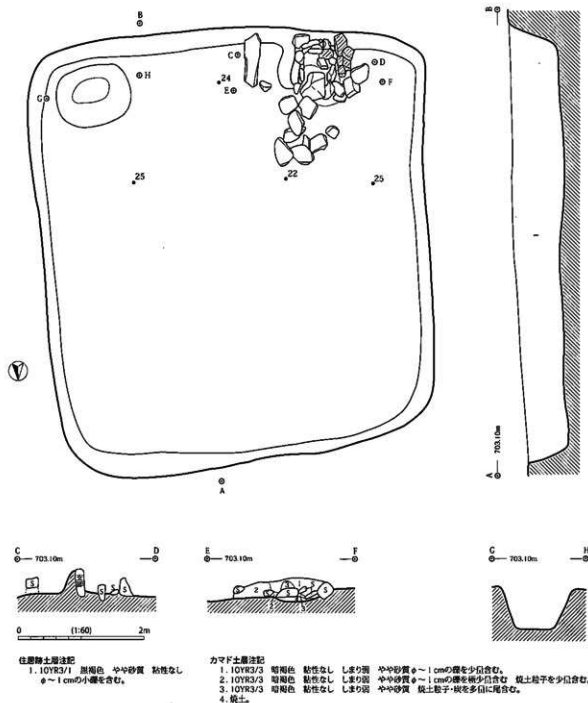
以上の土器から11世紀中～後葉と考えられる。

## 4号竪穴住居跡 (SB4) (第53・54図、PL13)

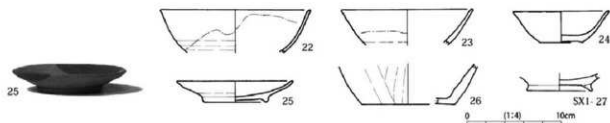
平面プランは隅丸正方形で、面積 15.75 m<sup>2</sup>を測る。重複関係では1号竪穴住居跡 (SB1) と重複し1号竪穴住居跡のカマドを本跡が壊していることから本跡の方が新しい。

床面で貼床や硬化面は認められず、地山を掘り込んで整えたのみと考えられる。床面上には柱穴や周溝はない。

カマドは石組みカマドで、住居跡の南壁の中央より西側に構築されている。向かって左側の袖下部は地山部分を作り出し、その上部を石組みで構築している。右側の袖は床面直上から石組み構築である。燃焼



第53図 4号竪穴住居跡 (SB4)



第54図 4号竪穴住居跡(SB4)・沢(SX1)出土土器

部中央には支脚石があり、奥壁から焼き口にかけて天上部から崩壊したと思われる天井石が認められる。煙道は検出できなかった。南東部コーナー付近で楕円形の貯蔵穴と考えられる土坑1基を検出した。

遺物では、カマド周辺のほぼ床面直上から破片が数点出土している。その他、覆土から若干の遺物が出土している。

3号竪穴住居跡よりやや古い。22、23、25はすべて付け掛けで施軸されている。22は深めの椀、23は底部を欠く坏であるが、共に底部近くにてヘラ削りが施されている。25は皿である。24は口径が小さく、椀を除いて坏の特徴である小型化が認められることは10世紀中～11世紀初めの特徴といえる。

## 2 土坑と出土遺物

### 平成12年度調査の土坑

土坑はロームマウンドや木の抜根跡とみられる落ち込みが多いが、9基の土坑は3つのタイプに分類できる。1つは平面プランが不整形のタイプで1号土坑があげられる。2つ目は平面プランは円形、底面が平坦で、断面寸胴形のタイプで2号、3号、4号、5号、7号、8号土坑があげられる。3つ目は平面プランは円形で、底面に丸味を持ち、断面では平面プランより底面の方が小さなタイプで6号、9号土坑がある。

### 平成15年度調査の土坑

#### 1号土坑(SK1)(PL13)

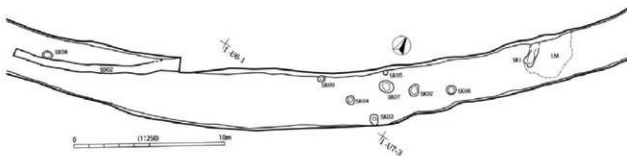
平面が楕円形、断面はタライ状である。

本跡の南東部付近に位置する。周辺に他の土坑は見当たらず、単独での検出であった。

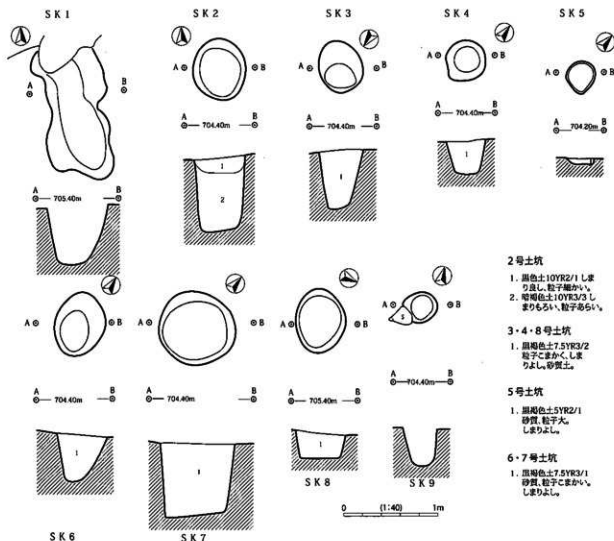
覆土中に細かな鉄片が含まれていることが確認された。鉄片は鍛造剥片である。製鉄に関する遺構と考えられるが、底部・壁に被熱部分などの特殊な状況はみられなかった。

サンプリングした覆土を洗浄(ふるいの目盛り0.5mm)した結果、一定量の鍛造剥片や粒状滓と若干の鉄滓が出土している。

時期決定の根拠になるような遺物が存在せず時代は不明確だが、沢(SX1)で多量な製鉄関係遺物と



第55図 H12年度 菅ノ沢遺跡本調査全体図



第56図 H12年度 調査の土坑 (SK1~9)

共に高台坪内黒土師器出土し、これが平安時代（9世紀後半～11世紀後半）と考えられる点、本跡が製鉄といった点においてSK1と関係する点、平安時代の集落の一面に本跡が位置する点から平安時代（9～11世紀）の可能性が考えられる。

その他のSKについては遺物の出土はなくSK同士の関連が考えられないため、一覧表を掲載しておく。（第6表）

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
SK1	140	70	64	上部はハコツクに削られる
SK2	63	55	82	
SK3	55	43	63	
SK4	45	42	36	
SK5	34	29	8	
SK6	67	52	56	
SK7	79	75	84	
SK8	65	54	28	
SK9	36	30	42	

第5表 H12年度 土坑調査一覧

- 2号土坑
1. 黒褐色土10YR2/1しまり良し、粒子細かい。
  2. 暗褐色土10YR3/3しまりもろい、粒子あらい。
- 3・4・8号土坑
1. 黒褐色土7.5YR3/2粒子こまかく、しまりよし。砂質土。
- 5号土坑
1. 黒褐色土5YR2/1砂質、粒子大。しまりよし。
- 6・7号土坑
1. 黒褐色土7.5YR3/1砂質、粒子こまかい。しまりよし。

	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
SK1	92	60	17
SK2	42	40	19
SK3	38	38	10
SK4	38	36	15
SK5	36	32	14
SK6	38	36	37
SK7	48	44	27
SK8	46	42	19
SK9	32	32	10
SK10	40	34	20
SK11	36	32	24
SK12	44	40	35
SK13	38	32	22
SK14	36	36	33
SK15	34	30	21
SK16	32	28	15
SK17	132	104	28
SK18	44	36	22
SK19	120	100	22
SK20	28	28	11

第6表 H15年度調査管ノ沢遺跡土坑一覧

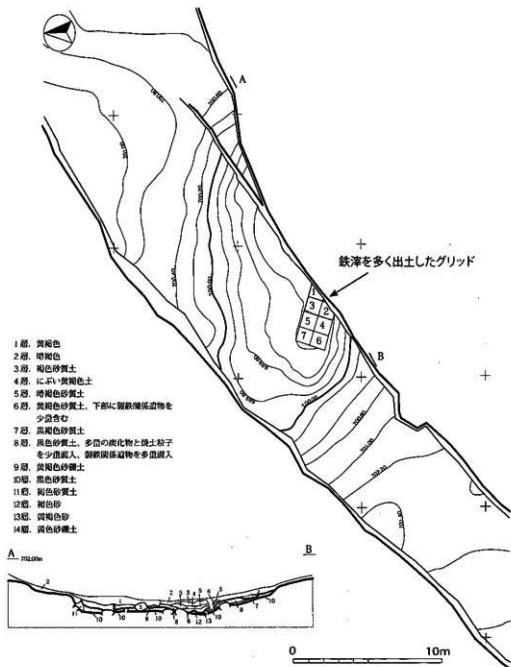


3 沢と出土遺物 (SX1) (第54・57図、PL14)

鉄滓を多く出土している。出土状況が精錬滓、鍛錬鍛冶滓、あるいは製鉄遺構(羽口・窯壁)の一部位であることから、それら破片の分布状況から調査区外の南西付近に製鉄関連遺構があることが予想される。遺構廃棄時に破壊され、鉄滓などと共に自然の窪地である沢状地形に投棄されたものと考えられる。

北側から南に向かって傾斜する窪地である。幅は1.68～1.98m、深さ1.6mを測る。長さは調査区を横断するため不明である。覆土は全体にしまり・粘性ともなく、沢状地形の中心部に設定したグリッド周辺で炭化物を多く混入する。鉄滓などの製鉄関連遺物が多く出土したのは調査区南東壁際、1～3グリッドの8層である。

出土遺物は覆土中から高台案内黒土師器の破片が1点である。時間幅がある遺物であるため細かい時期は確定できない。遺物の時期は9世紀半～11世紀後半と考えられる。



第57図 多量の鉄滓が出土した沢 (SX1)

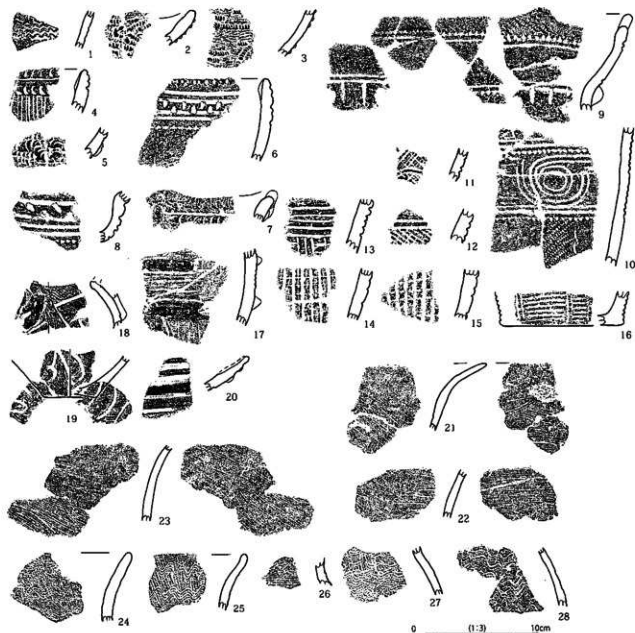
## 4 遺構外出土の遺物

## 土器

検出面で縄文時代早期の破片が1点出土している。1は山の神遺跡で主体的に出土した押型文の細久保式と考えられる。

縄文時代前期では、前期末葉の十三菩提あるいはそれに比定される2、3が出土している。両者とも刻み目のある浮線文が貼り付けられているが、2は連続的に貼付されているのに対し、3は一部不連続である。

縄文時代中期初頭では、4～17があげられる。4と5・7・8(鋸歯状)は細かな刺突・刻み。5は隆帯(浮線)上に細かな爪形様の刻みを持つ。9・10は五領ヶ台式土器の中でもほぼ典型的な文様構成の縄文系土器であるが、キャリバー形というよりはやや胴の張るタイプのものである。11～16は沈線文系の土器である。11・12はやや古手の細沈線文が施される。それに対し13～15は新しいタイプであろうか、断面かまぼこ形の深い沈線の施された沈線文系といえる。16は沈線の彫りは深いが底部まで文様帯がおよんでいることから11・12よりは新しいものと考えられる。18・19は後期前葉沈線に区画された文様

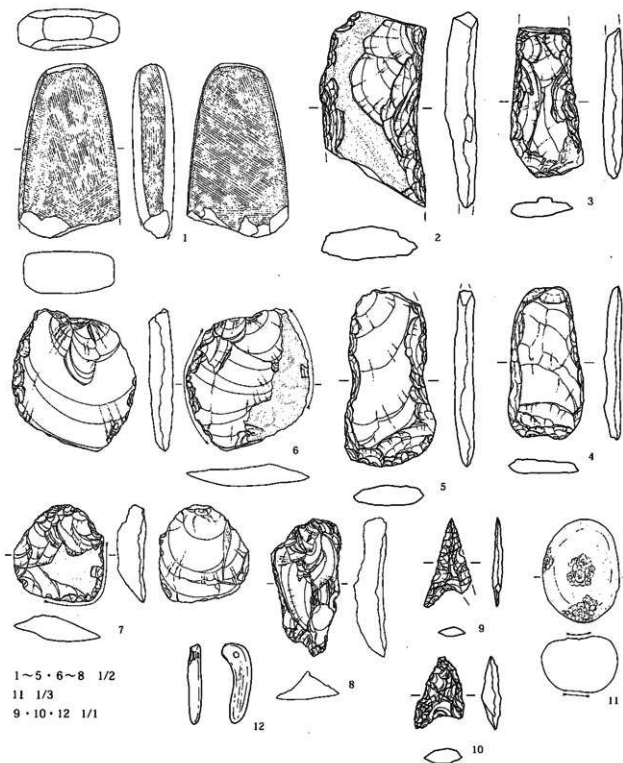


第58図 菅ノ沢遺跡出土土器

帯の中を磨消縄文で区画している。縄文時代晩期（末葉）は20で浅鉢と思われる。

弥生時代後期

検出面から出土した遺物である。弥生時代後期では条痕文（刷毛目）の施された21～23と波状文が施された24～28に分類できる。条痕文としたグループの条痕が刷毛目に近いという古墳時代的な様相がみられることから弥生時代の後期後半と考えられる。



1～5・6～8 1/2  
 11 1/3  
 9・10・12 1/1

第59図 菅ノ原遺跡出土石器

## 石器

遺構から出土した石器は3・4・7・8・12である。

1はロジン岩製の定角式の磨製石器である。非常に丁寧に研磨されており、全体に擦痕が観察される。刃部は破損しているが、破損後の使用痕は認められない。

2～5打製石斧は2は短冊形、3・4は楕形で、5は分銅形である。石材は2が凝灰岩、3・4は凝灰質砂岩、5は黒色片岩である。2は基部と刃部を欠損している。3・4は刃部に摩耗が見受けられる。5は摩耗が著しいが石材の性質からか節理での剥離が著しい。

6・7は緻密な凝灰岩製のスクレーパーで表裏共刃部は鋸歯状を呈し、一部の刃部に（図中の矢印）使用痕が認められる。

8は珩質粘土岩（考古学では従来頁岩）である。石錘と考えられるが、一般的な石錘とは形状が若干異なるようである。

9・10黒曜石製のは凹器の石鏃である。9は脚部を欠いている。押圧剥離は両者ともソフトハンマーと考えられる。

11は花崗岩製で、両面に凹みが認められる。敲打痕は下部と左側面に残されている。全面の摩耗は認められるが、顕著ではない。

12は表面観察からメノウ製と考えられる。

図番号	遺構	出土位置	備考	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	日付	石材
1	ゲット	I-U6-3	磨製石斧	92.0	54.0	22.0	173.84	00・5・25	ロジン岩
2	ゲット	II-Y10-11	打製石斧	103.0	56.0	17.0	106.1	00・5・24	凝灰岩
3	SK01		打製石斧	79.0	38.0	11.0	42.19	00・5・30	凝灰質砂岩
4	SK01		打製石斧	80.0	40.0	9.0	36.92	00・5・30	凝灰質砂岩
5	ゲット	I-P23-9	打製石斧	92.0	48.0	10.0	68.43	00・6・1	黒色片岩
6	ゲット	II-Y10-9	スクレーパー	76.0	65.0	13.0	61.63	00・5・24	凝灰岩
7	SK01		スクレーパー	52.0	48.0	15.0	34.05	00・6・1	凝灰岩
8	SB04	覆土(乙)	石錘?	74.0	36.0	17.0	36.02		珩質粘土岩(※)
9	IV層上面	II-Y14-1, IV層上面	石鏃	24.0	13.0	2.50	0.50	00・6・5	チャート
10	試掘Hフ	Hフ4 黒色土	石鏃	19.0	13.0	5.0	0.83	00・5・15	黒曜石
11	ゲット	I-U7-1	敲石	83.0	61.0	44.0	339.33	00・6・2	花崗斑岩
12	SK01	II層上	勾玉	20.5	8.0	3.5	0.66	00・5・30	不明(メノウ)軟玉?

第7表 H12年度 菅ノ沢遺跡出土石器一覧

## 第3節 自然科学分析

## 1 樹種同定および年代測定

菅ノ沢遺跡出土遺物樹種同定および年代測定について、パリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託して分析した結果を報告する。

対象とした試料は沢から出土した炭化材で、同一の試料について年代測定と樹種同定の2種類の分析を行った。炭化材は製鉄関連遺物と思われる各種の鉄滓と共存しており、出土状況から判断して製鉄関連の燃料材と考えられる。

分析機関と協議の結果、炭化材中より丸材2点（試料番号1・2）、割材10点（試料番号3～12）の計12点を選択した。これらの試料のうち、試料番号1～6を対象に放射性炭素年代測定を、12点全点を対象に樹種同定を実施した。なお、年代測定は採取した炭化材が微小であったためAMS法を採用した。

## 放射性炭素年代測定

結果を表1・2に示す。試料の測定年代(補正年代)は、 $1,010 \pm 180$  BPの値を示した。これらの年代は概ね11～12世紀頃に相当する年代である。

## 樹種同定

試料の木口(横断面)、柃目(放射状断面)、板目(接線断面)の3割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その結果から種類を同定した。結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹2種類(コナラ属コナラ亜種クヌギ節・コナラ属コナラ亜種コナラ節)に同定された。

また、7点の試料(試料番号1・2・5・7・8・10・12)には、樹皮が付着あるいは樹皮が剥落した痕跡が認められた。そこで、これらの最終年輪形成状況の観察も行った。その結果、すべての試料で夏に形成される晩材部が形成終了、または形成中としてもほぼ形成終了に近い状況であることが確認された。木炭用の樹木の伐採および焼成は、木材の生長活動および樹液の流動が止まり、水分が少なく材質も安定する秋～冬が良いとされる(岸本・杉浦 1980)。これらの炭化材の観察結果から、今回の試料もおそらく晩材部の形成終了に近い秋以降に採取され、利用されたと考えられる。

試料番号	形状	樹種	試料の質	重量(g)	補正年代BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代BP	Code No.
1	丸木材	コナラ属コナラ亜種クヌギ節	炭化材	5.56	1110 ± 30	-24.60 ± 0.78	1100 ± 30	IAAA-31793
2	丸木材	コナラ属コナラ亜種クヌギ節	炭化材	0.93	1040 ± 30	-29.69 ± 0.98	1110 ± 30	IAAA-31794
3	削材	コナラ属コナラ亜種コナラ節	炭化材	1.20	1150 ± 30	-27.18 ± 0.73	1180 ± 30	IAAA-31795
4	削材	コナラ属コナラ亜種コナラ節	炭化材	3.56	1060 ± 30	-26.13 ± 0.63	1080 ± 30	IAAA-31796
5	削材	コナラ属コナラ亜種コナラ節	炭化材	3.06	1080 ± 30	-24.58 ± 1.06	1070 ± 30	IAAA-31797
6	削材	コナラ属コナラ亜種クヌギ節	炭化材	2.99	1050 ± 30	-25.99 ± 0.80	1070 ± 30	IAAA-31798
7	削材	コナラ属コナラ亜種クヌギ節						
8	削材	コナラ属コナラ亜種コナラ節						
9	削材	コナラ属コナラ亜種クヌギ節						
10	削材	コナラ属コナラ亜種コナラ節						
11	削材	コナラ属コナラ亜種コナラ節						
12	削材	コナラ属コナラ亜種クヌギ節						

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第8表 樹種同定と年代測定結果一覧

試料番号	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)										相対比	Code No.		
		cal	AD	896	-	cal	AD	923	cal	BP	1,054			-	1,027
1	1110 ± 30	cal	AD	940	-	cal	AD	982	cal	BP	1,010	-	968	0.594	IAAA-31793
		cal	AD	983	-	cal	AD	1,022	cal	BP	967	-	928	1.000	
2	1040 ± 30	cal	AD	783	-	cal	AD	788	cal	BP	1,167	-	1,162	0.029	IAAA-31794
		cal	AD	831	-	cal	AD	838	cal	BP	1,119	-	1,112	0.046	
3	1150 ± 30	cal	AD	874	-	cal	AD	904	cal	BP	1,076	-	1,046	0.286	IAAA-31795
		cal	AD	914	-	cal	AD	976	cal	BP	1,036	-	974	0.639	
4	1060 ± 30	cal	AD	904	-	cal	AD	915	cal	BP	1,046	-	1,035	0.149	IAAA-31796
		cal	AD	965	-	cal	AD	966	cal	BP	985	-	984	0.025	
5	1080 ± 30	cal	AD	976	-	cal	AD	1,018	cal	BP	974	-	932	0.826	IAAA-31797
		cal	AD	900	-	cal	AD	919	cal	BP	1,050	-	1,031	0.272	
6	1050 ± 30	cal	AD	959	-	cal	AD	1,002	cal	BP	991	-	948	0.694	IAAA-31798
		cal	AD	1,012	-	cal	AD	1,016	cal	BP	938	-	934	0.033	
7	1050 ± 30	cal	AD	978	-	cal	AD	1,020	cal	BP	972	-	930	1.000	IAAA-31798

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P J Reimer) を使用  
2) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第9表 暦年較正結果一覧

## 2 鉄の成分分析

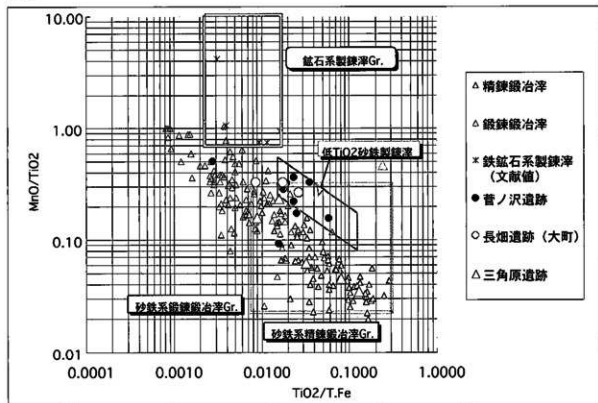
鉄製品および製鉄関連遺物については、鉄生産過程および鉄成分分析による原料産地の解明を目的として、JFEテクノリサーチ株式会社に委託して分析を行った。

分析試料は、平成15年度の調査で確認した沢と1号土坑から出土した鉄製品およびその関連遺物で、化学成分分析や顕微鏡組織観察を含む自然科学的観点からの分析を行った。

分析の結果、低チタン(TiO<sub>2</sub>)砂鉄を原料とした製錬滓(試料番号4・5・7・13・15)、梘形鍛冶滓などの精錬滓(試料番号2・8・14)ならびに鍛錬鍛冶滓(試料番号1)、鍛造薄片(試料番号16)など、製鉄から製品製造までの一連の鉄滓系遺物が見出された。

本分析調査の鉄滓資料は、いずれも低チタン砂鉄を原料とした製錬滓と精錬滓類に分類できる特徴がある。今回は、遺跡北側を流れる乳川で採集した砂鉄の成分分析を行ったが、これも低チタンを特徴とすることが判明した。また、菅ノ沢遺跡の北2km程度にある長畑遺跡の11世紀前半代に比定できる第5号住居跡から出土した鉄滓も低チタン砂鉄を原料としていることがわかっていく。

これまで長野県内で出土した鉄滓試料は、高チタン砂鉄を原料するものが多かった。今回の分析結果から判断すると、菅ノ沢遺跡および長畑遺跡では、低チタンの乳川産砂鉄が使われた可能性が高いと考えられる。



第60図 鉄成分分析グラフ

## 3 分析結果に関する所見

## 放射性炭素年代

沢から出土した炭化材の放射性炭素年代(補正值)は、11～12世紀に集中している。同じ沢から出土した高台内黒土師器の破片は9世紀半ば～11世紀後半と考えられるため、遺物の年代と測定年代とは重複している。おそらく、11世紀代に伐採された木材が、なんらかの営為によって炭化木材となり、さほどの時間幅を置かず鉄滓や土器片などとともに沢へ廃棄されたと考えてよさそう。

また、確認した竪穴住居跡には10世紀半ばから11世紀初頭の特徴を示す坏が出土した4号竪穴住居跡や、11世紀半ばから後葉にかけての土器をもつ3号竪穴住居跡が存在する。古代菅ノ沢集落に暮らしの人々のなかには、材の伐採や炭化、廃棄に関わった者がいたと考えていいのではなかろうか。

#### 樹種同定

製鉄関連遺物等とともに出土した炭化材は、クヌギ節・コナラ節の2種類であった。これらはともに二次林の主構成種であり、木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中でも特に優良な種類とされる(平井 1979)。これらの炭化材は、沢の傾斜面において鉄滓とともに出土している点から製鉄操業時の残渣と考えられ、これらの2種類の樹種が燃料材として利用されていた可能性が高い。

長野県下では、当該期の製鉄燃料材の木材利用に関する資料が少なく、木材利用の傾向や選択性は不明である。他地域の分析調査事例をみると、群馬県大胡町乙西尾引遺跡で9世紀中頃とされる製鉄炉や炭窯から出土した炭化材の大部分がクヌギ節であった例(高橋・鶴 1994)や、富山県太閤山ランド内遺跡群の8世紀代および10世紀の製鉄炉や炭窯等から出土した炭化材は様々な種類が混在する例(島地ほか 1983 A・1983 B)がある。今後、本遺跡周辺においても、製鉄炉や炭窯に伴う炭化材の調査事例を蓄積し、検討を加えていく必要がある。

#### 鉄の成分分析

製鉄関連遺物は、沢から製錬滓や流出滓などの精錬滓や炉内製錬滓が多く出土し、1号土坑では鍛造薄片、粒状滓などが多いなど、出土の状況に偏在性がうかがえる。このことは、これらの遺物が廃棄されていた沢近くで製鉄から製品製造までの作業が行われていたことを示している。今回の調査では、竪穴住居跡やその周辺で大鍛冶・小鍛冶が行われた形跡は認められていない。また、3・4号竪穴住居跡の完掘後に製鉄関連遺物が出土した沢の調査を行ったため、住居覆土中の微細遺物採取も行っていない。しかし、単独で検出された1号土坑の覆土中に細かな鍛造薄片や粒状滓と若干の鉄滓が含まれていたことをみても、古代菅ノ沢集落内のどこかで鉄生産が行われたとみていいのではなかろうか。

鉄滓の成分分析では、原料として低チタン砂鉄が用いられたことがわかった。しかも乳川から採取された砂鉄や長畑遺跡出土の鉄滓も同様の分析値を示している。たびたび指摘しているように、本遺跡は乳川左岸流域に立地している。その遺跡で製鉄から製品製造までを行っていたと考えられるならば、その原料として乳川の砂鉄を用いることはごく自然な成り行きである。むしろ、菅ノ沢遺跡は乳川の砂鉄を求める人々によって営まれた鉄製作集団の古代集落跡といえるのではなかろうか。菅ノ沢古代集落で生産された鉄および鉄製品が、やがて近隣諸集落へ分配される。長畑遺跡出土の鉄滓も、こうした鉄流通ルートの一環として理解することができよう。

#### 引用文献

- 岸本 定吉・杉浦 銀治,1980,「日曜灰やき師入門」,総合科学出版,250p.  
 大塚 昌彦,1999,「薬師」遺跡の試掘調査,『澁川市発掘調査報告書第67集 澁川市内遺跡XII 一久宮戸遺跡・薬師遺跡・寺塚遺跡・中原遺跡・田中遺跡-1』,澁川師教育委員会,3-4.  
 大塚 昌彦,2000,「伏焼法による炭焼き土坑 一薬師・半田中原遺跡の製鉄関連炭焼き土坑-」,群馬考古学手帳,10,群馬土器協会,55-67.  
 島地 謙・林 昭三,1983 A,出土木炭の樹種,「都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群 発掘調査概要 高山遺跡・東山・道跡・東山・遺跡・夜野遺跡・南太閤山・遺跡・南太閤山・遺跡」,富山県教育委員会,68-73.  
 島地 謙・林 昭三,1983 B,出土木炭の樹種,「県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2) 五太郎A遺跡・新造地A遺跡・五太郎B遺跡・東山・遺跡・土台A遺跡・野田A遺跡」,富山県教育委員会,57-61.  
 高橋 敦・鶴 明,1994,乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について,「大胡町部遺跡群発掘調査報告書第1集」,大胡町教育委員会,41-49.  
 高橋 敦・辻本 裕也・橋本 真紀夫,1999,「薬師」遺跡出土炭化材の樹種,「澁川市発掘調査報告書第67集 澁川市内遺跡XII 一久宮戸遺跡・薬師遺跡・寺塚遺跡・中原遺跡・田中遺跡-1」,澁川師教育委員会,5

## 第4節 小結

長さ120m、幅10mばかりの調査範囲にもかかわらず、今回の調査によって、菅ノ沢遺跡は大北地域の歴史に一石を投ずる価値ある遺跡のひとつとなった。

その第一として、11世紀ごろ鉄生産に深く関わりをもつ集団が居住した集落である可能性が極めて高くなったことが挙げられる。11世紀といえば、古代律令末期にあたり世はすでに末法の時勢となっていた。荘園はすでに国守の手を離れ武士化しつつある在庁官人の手に握られ、郡や郷は富裕農民による大規模開発によって解体し新しい村が誕生しつつある時代でもある。大北地域における政治状況は現在までのところ必ずしもつまびらかではないが、こうした世情の波がこの地域の人々の暮らしに影響を与えていたことは否定できない。ともかくも、乳川に産する砂鉄に目を付けた集団が、菅ノ沢一帯を開発し、製鉄を営んでいたことは隠すべき事象である。しかも、当地で産出した鉄やその製品は、何らかのルートに乗って近隣集落に運ばれ、利用されていたこともほぼ明らかになった。これが、安曇郡一円に広がっていたものが、それとも西山山麓を牛耳る一富裕層の手になるものなのかは今後の調査に待たねばならないが、いずれにせよ、その端緒となる成果を挙げることができた。

第二に、古墳中期の竪穴住居跡が確認されたことである。古墳時代は、乳川流域であると沖積地であるを問わず、神明原扇状地一帯から遺跡が姿を消すと考えられてきた。菅ノ沢に古墳時代の人々が忽然と登場した意味は、いったい奈辺にあったのだろうか。5世紀は日本列島が外来文化の第二波に覆われる時期である。漢字や仏教といった知的文化もさることながら、のちに庶民の日常生活にも深く影響を与える須恵器の生産やかまどの伝来など、大陸や半島系の文化が陸続とわが国にもたらされた。戦闘兵器として馬が極めて重要な資源になり、それに伴う馬具や新たな武器が開発され始めたものもこの頃である。あくまでも推測の域を脱し得ないが、古墳中期に菅ノ沢を訪れた人々もまた、乳川の砂鉄に着目していたとは考えられないか。ただ、技術の未熟さは如何ともしがたく、宝は持ち腐れたままさらに数百年の時の流れを甘受せざるを得なかったのだろう。

第三に、弥生後期の遺物が発見されたことである。神明原扇状地の遺跡は、食物生産を開始する弥生時代に入って扇端部に並列する。水稲耕作はもちろんのこと、およそ食物生産に適しているとは思えない菅ノ沢に、弥生時代の人々が分け入った理由は定かではない。

さきにも述べてきたように、菅ノ沢遺跡の調査面積は全遺跡の一割にも満たない。さいわい公園化によって多くの文化財は破壊から免れることができた。遺跡が広がるアカマツ林の地下には、歴史に色どりを添え、香りを与える優れた文化財がまだ豊富に眠っている。私たちは、祖先が遺してくれた唯一無二の文化遺産を、利活用しながら地域の歴史を解明し、未来へ伝えていく課題を背負っている。



## 第5章 乳川石堤

平成 11 年度、公園外周道路の建設に伴って、記録保存のための調査を行った。

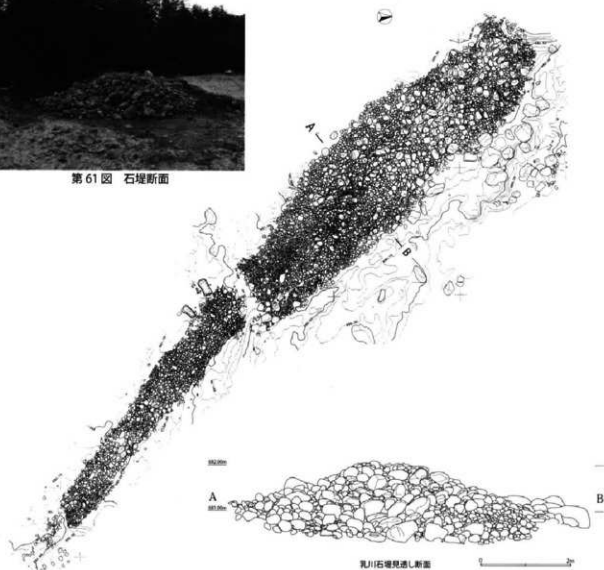
神明原扇状地の扇央部の南寄り、乳川にかかる菅ノ沢橋からおよそ 100 m ほど北に入った地点に位置し、標高は約 690 m（断面部分で 690 m）を測る。

乳川は餓鬼岳に源を有し、近世にいたって幾度となく西山村を襲っている。最も大きな洪水は 1816（文化 13）年で、西山村全耕地の 3 分の 1 以上が被害に遭ったとされている。これをきっかけに西山村と須沼村の良民が総出で石を運び、翌年の 1817（文化 14）年には長さ 280 m、高さ約 5 m の石堤を築いているという古文書（清水家文書）が残されている。

現存する形状は乳川の氾濫に対して弓なりの形を呈する河川の流れを元の乳川に誘導する形になっており、北西側から南西に向かって約 280 m ほどの長さにおよんでいる。道路部分の約 10 m は消滅したが、残りの箇所はアカマツ林の中に残っている。



第 61 図 石堤断面



第 62 図 石堤平面図と断面図



第63図 文化13(1816)年 松川組西山村川除目論見帳

文化十三年  
松川組西山村川除目論見帳  
閏八月  
(第九家文書935)

乳川  
敷拾間  
一切口石積長四拾間 高九尺  
踏五間  
比畔四百五拾坪  
人足貳千七百人

右川除目論見之通  
普請可申付者也

壬子六月 藤村十郎兵衛

清水又之丞 殿

上の史料から、乳川が決壊したとみられる箇所に2,700人の人足によって、断面台形の石堤（高さ9尺、底辺10間、上辺5間、長さ40間）を築いたことわかる。

この他、清水家文書の中には乳川の水利に関わる記録がいくつか残されている。

○文化4年6月「松川組松川村乳川通川除流失・田方水入・山道具損事書上帳」

6月1日の出水による被害報告

○文化13年10月「奉願口上之覚」

乳川満水後の復旧工事を須河村と組合になってやらせてほしいという西山村の願書

○文化14年正月「差上申済口証文之事」

川除工事の分担率をめぐる西山村と須沼村との訴訟の示談書

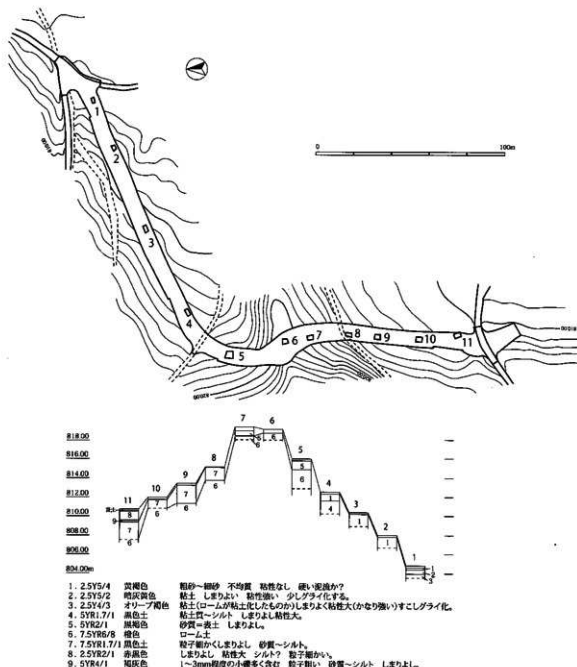
※上記の清水家文書は長野県立歴史館所有の文書であるが、大町市常盤には清水家文書以外にも、乳川の氾濫や水利に関する文書が残されている。常盤西山の倉科家文書や平林文書などがあげられるが、いずれも個人所有の文書である。

## 第6章 その他の遺跡

## 第1節 まねき遺跡

まねき遺跡は神明原扇状地の扇頂部、餓鬼岳から流れて乳川に合流する親川の左岸、扇平遺跡の西端部に接した標高約820～800mのテラス上に位置する。縄文時代前期後半から中期前半の遺跡である。現・寺海戸清水寺の前身の寺があったという伝承が残る。

平成12年度・13年度に3地点の試掘調査を行った結果、1地点(第64図)については面調査を行ったが、遺跡ではないと判断された。

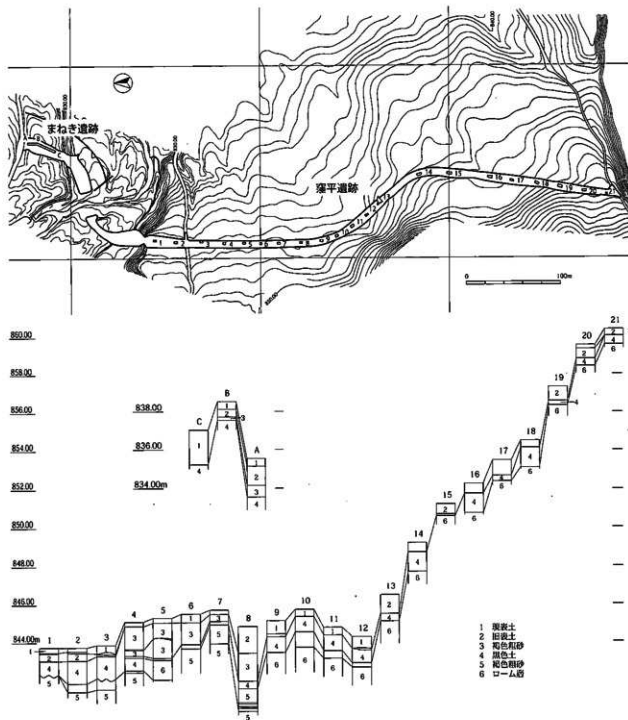


第64図 H12年度まねき遺跡試掘トレンチ配置図及び柱状図

## 第2節 窪平遺跡

神明原扇状地の扇頂部上の台地に位置する。まねき遺跡の南対岸の親川に沿ってある遺跡で、縄文時代中期の土器が採集されている。

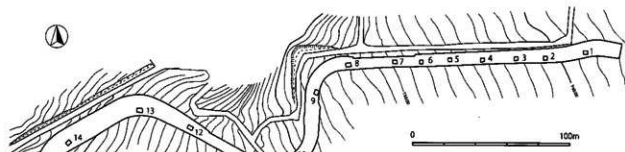
平成12年度に対象面積3,000㎡の内、84㎡の試掘調査を行った結果、遺物・遺構の検出は確認出来なかった。



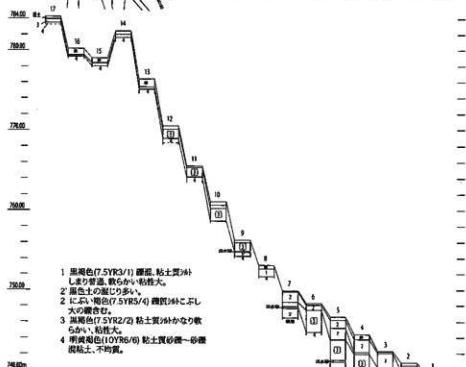
第65図 H12年度 窪平遺跡トレンチ配置図及び柱状図

### 第3節 寺海戸遺跡

神明原遺跡の沢を隔てた北側の段丘上、清水寺海戸集落の西に位置する。縄文時代中期の土器片が採集されている。東方にある清水寺は中世頃から存在したものと考えられている。



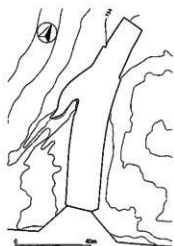
第66図 H12年度 寺海戸遺跡グリッド配置



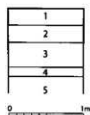
第67図 H12年度 寺海戸遺跡柱状図

平成12年度に68㎡の試掘調査を行ったが、遺構・遺跡ともに確認できなかった。

平成15年度は、縄文時代中期の遺跡として登録されていたことから、1500㎡の本調査を行ったが遺構・遺跡ともに確認できなかった。



第68図 H15年度 寺海戸遺跡試掘調査区



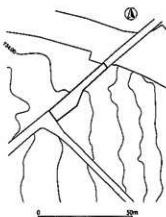
1. 暗褐色 (10YR : 3/3) 表土
2. 暗褐色土 (10YR : 3/3) しまりがあるが、乾燥すると崩れやすい。
3. 黒褐色土 (10YR : 2/1) しまりあり、均質な土壌。
4. 灰黄褐色土 (10YR : 4/2) 3層に性質は似ている。
5. ローム層 礫を混入する。

第69図 H15年度 寺海戸遺跡基本土層図

## 第4節 神明原遺跡

神明原扇状地の扇中央部、神明原集落を含んで分布する。北側に流れる沢に沿った段丘上の地形上にあり縄文時代中期後半の土器、石器が出土している。

平成10年度と15年度に、神明原遺跡内に道路建設が予定されたため、工事に伴った立合い調査を実施した。その結果、表土直下はすでに削平を受けていることが判明し、本調査の必要性はないと判断した。

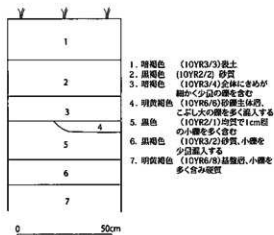


第70図 H15年度 神明原遺跡試掘調査区

## 第5節 山の神遺跡

神明原扇状地の扇頂部で、菅ノ沢遺跡の対岸から乳川に沿って西に広がる台地上に位置する。縄文時代早期～中期遺跡で各時期によって分布域に違いがみられると考えられている。

平成9～12年度に調査の実施された山の神遺跡の北側にあたり、遺跡が連続することが考えられるため、平成15年度に600㎡の試掘調査を行ったが、遺構・遺物ともに確認できなかった。



第71図 H15年度 山の神遺跡基本土層図

## 第7章 結語

縄文時代早期から始まる神明原扇状地上の人々の足跡は、押型文式土器（細久保式）とトロトロ石器を出土した山の神遺跡（既刊）で明確となった。41 という石器の数もさることながら遺構として検出された石列の存在自体は衝撃的である。今では山菜取りか魚釣りの人々しか入らないであろう扇状地上の山の中に、まさに山と共に生きた人々の足跡があったのである。山の神遺跡に限らず、扇状地上の数か所で押型文式土器の破片が散見されている。平成15年度の本調査では肩平遺跡の土坑内から押型文式土器の桶沢式が、菅ノ沢遺跡では押型文式土器の細久保式が数点（図化したのはそれぞれ1点）であるが出土している。

前期では初頭の尖底土器の破片が、肩平遺跡や山の神遺跡から遺構には伴わないが出土している。また前期末葉になると菅ノ沢遺跡では試掘・本調査で十三菩提式、あるいは併行期といわれる鍋屋町式類似の土器が出土している。

縄文時代中期には日本のどの地域でもいわれるように数・質共にピークを見せ、本扇状地のほぼ全域に広がりを見せるといっても過言ではないほどである。菅ノ沢遺跡では五ヶヶ台併行期の細沈線文系土器や集合沈線文系土器が試掘あるいは本調査で出土し、肩平遺跡では曾利式と考えられる矢羽状の沈線を持った土器が土坑から出土している。

次の縄文時代後期・晩期に至ると肩平遺跡からは縄文時代後期前半の深鉢や浅鉢、注口土器が数点ではあるが破片が出土している。また、土坑（SK13）からは東海系の中津式と考えられる土器の半完形が2個体分出土した。晩期では菅ノ沢遺跡から沈線文系に比定されると考えられる土器片が1点ではあるが土坑から出土している。

弥生時代の菅ノ沢遺跡の遺物では遺構検出面ではあるが、後期の波状文や条痕文のやや不明瞭な（刷毛目に近い）タイプの土器が見られるが、遺構は確認されていない。

古墳時代では、菅ノ沢遺跡で古墳時代中期（5世紀中葉～6世紀前半）の竪穴住居跡が1軒確認されている。山間地での集落の形成？なのか初現？なのか不明であるが、木地師などの存在を考えると、あるいは無雪期の季節に適応して営まれた山間地の集落ということも考えられよう。

奈良・平安時代でもやはり菅ノ沢遺跡では古墳時代中期の住居跡に近接して9世紀～11世紀前半までの竪穴住居跡が3軒確認されている。また、菅ノ沢遺跡で注目されるのは遺構からの出土ではないが、鍛冶に関係する遺物（羽口、鉄滓、粒状滓、窯壁の破片、スラブなど）が沢跡から投棄されたと思われる状態で多量に出土していることである。それらの資料の分析の結果、乳川流域の砂鉄にはチタンの含有が低く良質な鉄が得られることが判明してきている。

道路建設のための細長い調査区であるため、広範囲な確認は不可能であったが、古墳時代中期から平安時代まで住居跡がほぼ連続している（古墳時代後期を除く）と考えることができる。推定ではあるが山間地に住む必要性のある小集団が存在し、生計を営んでいたものと考えられる。古鍛冶に関係する集団や清水寺跡や牧の存在に関係するものであろうか。

中世や戦国時代になると山陵部の山城以外では、山の神遺跡や肩平遺跡で検出面出土の青磁や白磁、摺鉢、山茶碗、内耳鍋といった陶磁器が出土している。時期的に該当する遺構としては肩平遺跡の掘立柱建物跡2棟と柱六群の存在が確認されている。肩平遺跡の掘立柱建物跡が集落の一部であるかは判断に苦しいところであるが、山間地の谷間に「隠れ園分」・「谷戸集落」のような小集団の存在が考えられる。また、伝承によれば肩平遺跡付近に清水寺があったとされており、廃寺の跡が残存している可能性が考えられるが、現在のところ不明である。

近世の大明は糸魚川と松本を結ぶ千国街道が通り牛馬を使って運搬し、海産物をはじめ多くの物資の流通がはかられ、重要な経済的交通路の中継地となった。特に街道からの物資や近在の麻・煙草その他の集散地となる一大商業都市となった。

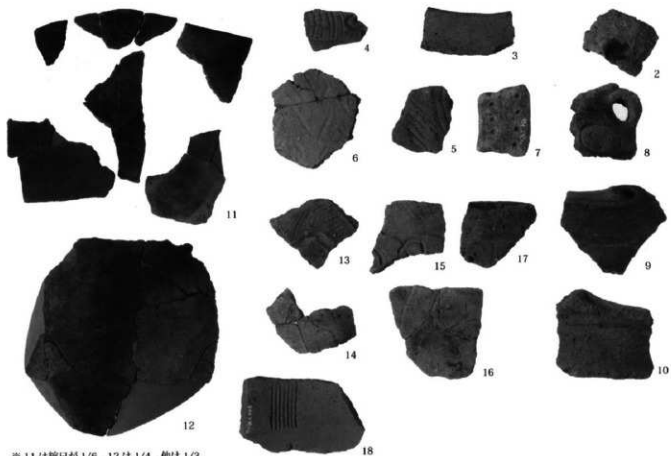
一方、常盤地区では近世に至ると乳川がたび重なって氾濫し、下流の集落に被害を与えていたことが清水家文書から知ることができる。また、文化13(1816)年の氾濫をきっかけとして石堤が構築されたことも文書に記述され、文書と一致する石堤が現在も残っているなど、古文書と構築物が一致する貴重な例といえよう。

乳川を初めとする崖錐の微扇状地の末端地域の西山や須沼地域周辺などでは地下水位が低いことから自然流路を利用した水路を幾筋も開通させ、耕土の安定をはかり広大な面積の開田を行っている。

縄文時代から連続と続く人と自然との関わりの痕跡を、遺跡という形で発掘作業の中からいくばくか知りえたと思える。神明原扇状地上のクリ・コナラといった自然林は人為的な働きによって山の植生は改変され現在に至っている。縄文時代には落葉広葉樹の林であったはずの山が、アカマツ・カラマツ林の放置林と化している。ある時は薪炭材として、ある時は有用材の供給地として、人間の都合によって利用されてきた経緯がある。近年、天然のダム林という言葉をよく聞く。縄文の森の再生とは何か？ その土地固有の植生の保全、そして復元ということを通して自然と人間の関係を考える良い機会なのかもしれない。



## 平成 15 年度 肩平遺跡 出土土器



※ 11 は縮尺が 1/6、12 は 1/4、他は 1/3

## 平成 15 年度 肩平遺跡 出土土器



※ 2・3・7 は 1/3

1 は 1/2、4・5・6 は 1/1

平成 12 年度 菅ノ沢遺跡 出土土器



※縮尺は 1/3

平成 12 年度 菅ノ沢遺跡 出土石器



※ 1～5、11 は 1/3  
 6～8 は 1/2  
 9・10・12 は 1/1



H 13 年度 肩平遺跡 調査前風景



H 13 年度 肩平遺跡 試掘トレンチ



H 13 年度 肩平遺跡 トレンチ精査



H 13 年度 肩平遺跡 トレンチ断面



H 14 年度 肩平遺跡 試掘調査区



H 14 年度 肩平遺跡 No.3 トレンチ (調査3区)



H 14 年度 肩平遺跡 トレンチ精査風景



H 14 年度 肩平遺跡 No.3 トレンチ断面 (調査3区)



H15年度 肩平遺跡 作業風景



H 15年度 肩平遺跡 調査2区調査前



H15年度 肩平遺跡 基本層序



H 15年度 肩平遺跡 調査4区調査前



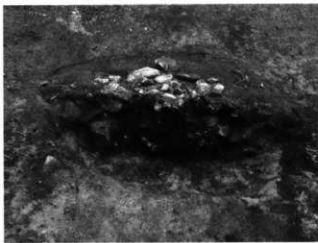
H15年度 肩平遺跡 1号掘立柱建物跡



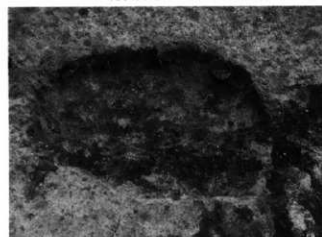
H15年度 肩平遺跡 2号掘立柱建物跡



H15年度 肩平遺跡 1号集石跡検出状況



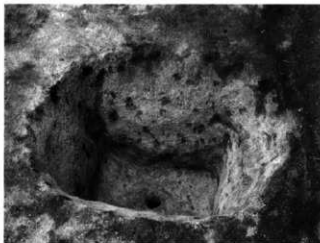
H15年度 肩平遺跡 集石跡 断面



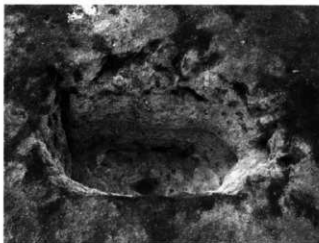
H15年度 肩平遺跡 集石跡 掘り形



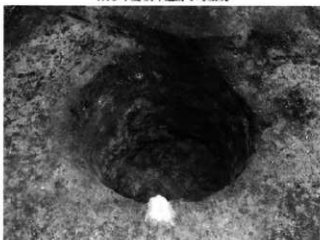
H15年度 肩平遺跡 集石跡 実測風景



H15年度洞平遺跡1号土坑



H15年度洞平遺跡2号土坑



H15年度洞平遺跡4号土坑



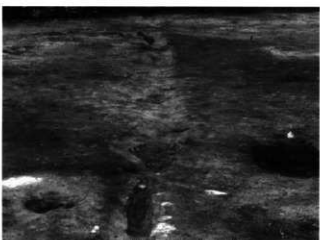
H15年度洞平遺跡5号土坑



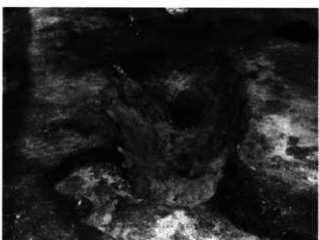
H15年度洞平遺跡7号土坑



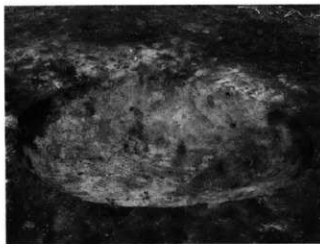
H15年度洞平遺跡9号土坑 断面



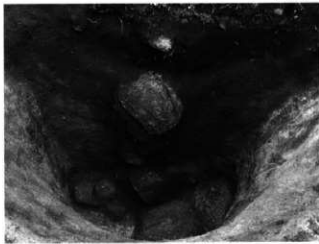
H15年度洞平遺跡1号溝状遺構



H15年度洞平遺跡9号土坑 断面



H15年度 洞平遺跡 10号土坑



H15年度 洞平遺跡 13号土坑断面



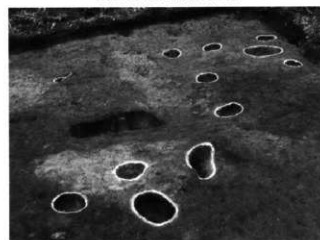
H15年度 洞平遺跡 13号土坑



H15年度 洞平遺跡 80号土坑



H15年度 洞平遺跡 13号土坑 掘下り作業



H15年度 洞平遺跡 調査3区 柱穴群 1



H15年度 洞平遺跡 調査3区 柱穴群 2



H12年度 菅ノ沢遺跡 試掘調査前風景



H12年度 菅ノ沢遺跡 試掘調査



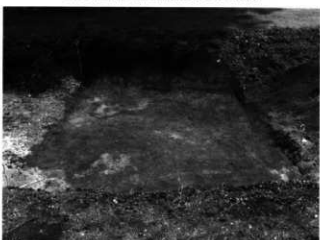
H12年度 菅ノ沢遺跡 トレンチ精査作業



H12年度 菅ノ沢遺跡 No.1 トレンチ掘削



H12年度 菅ノ沢遺跡 No.1 トレンチ断面



H12年度 菅ノ沢遺跡 No.2 トレンチ完掘



H12年度 菅ノ沢遺跡 No.8 トレンチ掘削状況



H12年度 菅ノ沢遺跡 No.8 トレンチ完掘

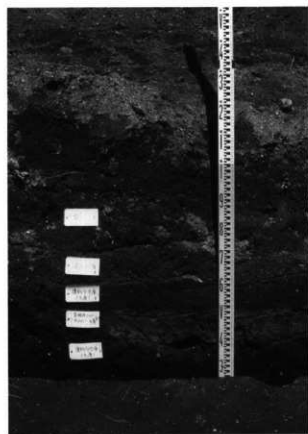




H12年度 菅ノ沢遺跡 調査作業風景



H12年度 菅ノ沢遺跡 調査区状況 (上面)



H12年度 菅ノ沢遺跡 調査区土層断面



H12年度 菅ノ沢遺跡 完掘状況 (遺構検出部)



H12年度 菅ノ沢遺跡 地質指導の状況



H15年度 菅ノ沢遺跡 縄文面掘削状況



H15年度 菅ノ沢遺跡 縄文面精査状況



H15年度菅ノ沢遺跡1号竪穴住居跡 完掘状況



H15年度菅ノ沢遺跡1号竪穴住居跡 カマド



H15年度菅ノ沢遺跡1号竪穴住居跡 断面



H15年度菅ノ沢遺跡1号竪穴住居跡のカマドと貯蔵穴



H15年度菅ノ沢遺跡1号竪穴住居跡 土器出土状況



H15年度 菅ノ沢遺跡2号竪穴住居跡 完掘状況



H15年度 菅ノ沢遺跡2号竪穴住居跡 断面



H15年度 菅ノ沢遺跡2号竪穴住居跡 炭化物出土状況



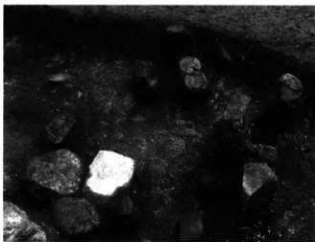
H15年度 菅ノ沢遺跡2号竪穴住居跡 カマド



H15年度 菅ノ沢遺跡3号竪穴住居跡 遺物出土状況



H15年度 菅ノ沢遺跡 3号竪穴住居跡 完備状況



H15年度 菅ノ沢遺跡 3号竪穴住居跡 西カマド



H15年度 菅ノ沢遺跡 3号竪穴住居跡 東カマド



H15年度 菅ノ沢遺跡 1号溝状遺構



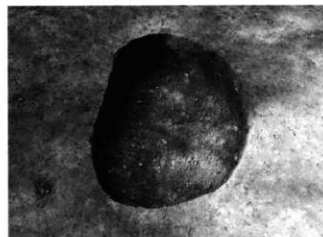
平成15年度普ノ沢遺跡4号竪穴住居跡完備状況



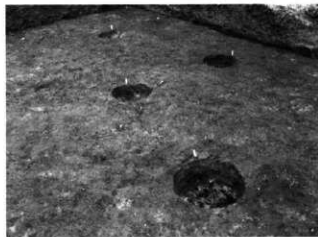
H15年度普ノ沢遺跡4号竪穴住居跡カマド



H15年度普ノ沢遺跡1・4号竪穴住居跡近景



H15年度普ノ沢遺跡1号土坑



H15年度普ノ沢遺跡9～12号土坑



H15年度 善ノ沢遺跡 (SK1) 簡易メッシュ設定状況



H12年度 まねき遺跡 トレンチ掘削状況



H12年度 まねき遺跡 No.5 トレンチ断面



H13年度 まねき遺跡 トレンチ掘削前



H13年度 まねき遺跡 トレンチ掘削状況



H14年度まねき遺跡 試掘



H14年度まねき遺跡 試掘



H14年度まねき遺跡 試掘



H12年度寺海戸遺跡 試掘 調査前



H12年度寺海戸遺跡 試掘トレンチ掘削



H12年度寺海戸遺跡 試掘トレンチ断面



H15年度寺海戸遺跡 試掘トレンチ



H15年度寺海戸遺跡 トレンチ断面



H12年度窪平遺跡 試掘調査前



H12年度窪平遺跡 トレンチ掘削



H15年度山の神遺跡 試掘調査前



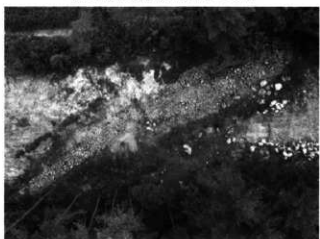
H15年度山の神遺跡 試掘トレンチ掘削



H15年度神明原遺跡 試掘トレンチ掘削



H15年度神明原遺跡 試掘トレンチ



H11年度乳川石堤 上空より空撮



H11年度乳川石堤 断面見越し





H11年度 乳川石堤 (道路建設予定地内)



H11年度 乳川石堤 作業風景



H11年度 乳川石堤 (石堤上部)



H11年度 森の中へ続く乳川石堤



「山の神」



「山の神」の祠と奉剣



「山の神」の祠



「山の神」の奉剣

# 報告書抄録

書名	国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書 3
副書名	肩平遺跡 菅ノ沢遺跡 まねき遺跡 寺海戸遺跡 神明原遺跡 窪平遺跡 山的神遺跡 乳川石堤
巻次	大町市内 その2
シリーズ名 番号	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 68
編著者名	藤原直人
編集 発行機関	財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926
発行年月日	2004年12月31日

遺跡名	所在地	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査年月日	調査面積	調査原因
かみしろのいりまき 肩平遺跡	大町市常盤清水 西平 7917-1 他	20212	56-34	36° 27' 27"	137° 48' 59"	2001年10月10日～10月23日 2002年4月22日～6月13日 2002年6月6日～6月28日 2003年5月27日～7月31日 2004年1月7日	640㎡ 1800㎡ 2200㎡ 5600㎡ 立会い	国営アルプス あづみの公園 建設に伴う事 前調査
かみしろのいりまき 菅ノ沢遺跡	大町市常盤西山 菅ノ沢 8003-1 他	20212	56-4	36° 26' 57"	137° 49' 44"	2000年2月21日 2000年5月18日～6月5日 2000年8月21日～8月23日 2003年8月6日～10月31日	40㎡ 304㎡ 900㎡ 1200㎡	
まねき遺跡	大町市常盤清水 寺屋敷 7840-6 他	20212	56-36	36° 27' 29"	137° 48' 46"	2000年6月29日～7月6日 2001年10月10日～10月23日 2001年11月27日～11月28日 2002年4月22日～6月13日	44㎡ 1280㎡ 75㎡ 3200㎡	
てらめいのいりまき 寺海戸遺跡	大町市常盤南水 寺海戸 7679-20 他	20212	56-17	36° 27' 48"	137° 49' 5"	2000年6月30日～7月6日 2003年10月14日～10月15日	68㎡ 300㎡	
かみしろのいりまき 神明原遺跡	大町市常盤南水 神明原 7779-36 他	20212	56-16	36° 27' 42"	137° 49' 23"	1999年2月15日 2003年3月25日	16㎡ 210㎡	
かみしろのいりまき 窪平遺跡	大町市常盤南水 窪平 7871 他	20212	56-37	36° 26' 44"	137° 47' 36"	2000年11月13日～11月16日	84㎡	
やまのかみしろ 山的神遺跡	大町市常盤南水 山ノ神 7926-1 他	20212	56-5	36° 27' 32"	137° 49' 8"	2002年6月6日～6月28日 2003年8月1日～8月8日	410㎡ 600㎡	
かみしろのいりまき 乳川石堤	大町市常盤西山 8045-1 他	20212	56-6	36° 27' 8"	137° 49' 53"	1999年9月7日～9月24日	80㎡	

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物
肩平遺跡	散	縄文、中世	掘立柱建物跡、土坑、集石、 焼土集中	土器、陶磁器、石器
菅ノ沢遺跡	散(集)	縄文、弥生、古墳、 奈良、平安	竪穴住居跡、土坑、溝、 性格不明遺構	土器、石器、鉄滓
まねき遺跡	散	縄文、中近世	なし	なし
寺海戸遺跡	散	古墳、中近世	なし	なし
神明原遺跡	散	縄文	なし	なし
窪平遺跡	散	縄文	なし	なし
山的神遺跡	散	縄文	なし	なし
乳川石堤	堤	中近世	石堤	なし

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 68  
国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書 3  
一大町市内その2ー  
肩平遺跡 菅ノ沢遺跡 まねき遺跡 寺海戸遺跡  
神明原遺跡 窪平遺跡 山の神遺跡 乳川石堤

発行 平成16年12月

発行者 国土交通省 関東地方整備局

例 長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

印刷 カシヨ株式会社

